
Knight of night

獅施額羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Knight of knight

【Nコード】

N5248I

【作者名】

獅施額羅

【あらすじ】

密かに物語のヒーローに憧れを持つ高校3年生の結城奏雅はつまらないバイトと希薄な友人関係の中で生活していた。そんな中、彼はあらゆる世界に《干涉》する力と出会う。理想のヒーローになる為に世界と世界を股にかけ奔走する異世界冒険ファンタジー。

第一話 少女と手鏡（前書き）

現在二作を同時連載しており、今作品で三作目となります。前二作も休載ではなく、それぞれの更新が遅れるかもしれませんが、執筆するのが一作のみですと行き詰った時に復帰に時間がかかるので、執筆から距離を置かぬように同時連載させていただいております。前述の通り更新は遅くなるかもしれませんが、気長にお付き合いいただけると光栄です。

第一話 少女と手鏡

物語のヒーローはいつだってカッコイイ。それは心や行いだけではなく顔も含めてだ。顔の良いものがヒーローを目指すのか、それともヒーローになるには顔が良くなければならないのか。

暗くなり人気のなくなった広い公園のベンチに腰かけた男は、満開の夜桜など見向きもせず手鏡に映った自分の顔を見ながらそんな考えに耽っていた。

鏡に映った顔はまるで絵画のようで刃物のように鋭い目、すっきりとした鼻、薄く潤った唇に白い肌、漆黒の長髪と、一見すると女性のようにもある。

「おい、そろそろ仕事の時間じゃないのか？」

手鏡を見ている男に隣の男が話しかける。今この公園にはこの二人しかない。

「そうだな。宿題は写し終えたか？」

「いや、まだだ。明日学校で返すよ、このノート。全く、新学期早々宿題付けにしゃがって」

「受験生なんだ。仕方ないだろう」

友人の愚痴に呆れたように言葉を返す。

「俺は大学なんか行きたくないっての」

「愚痴は一人で言ってくれ。じゃあな」

男は手鏡を高そうな黒いカバンに入れると、手を振る友人を無視して去って行った。

（今日は仕事……休もうか……）

そう思いつつも足は仕事場に向かっている。それと同時に周りの景色が閑静な住宅街から賑やかなネオン街へと変化する。

「あれ？ 奏雅^{そうが}じゃね？」

背の高い金髪の若い男から声をかけられる。

「コウガさん、本名で呼ばないでください。仕事場が近いんですか

ら客に聞かれてしまうかもしれないでしょう」

そう言いつつも奏雅の口調からはそのことに関して興味がないことが読み取れる。

「あ、今のでテンションが下がったんで今日休みます。よろしくお伝えください。では」

奏雅は思いついたようにそう言うのと踵を返しその場から去ろうとする。

「え！ 何言ってるの？ そんな適当じゃ客に逃げられんぞ」

「その適当がウリなんで。それに俺はこの仕事、さっさと辞めたいんですから」

「あっ、おい。待てよ」

呼びとめる男を無視して彼はその場を後にした。

時刻は午後七時。仕事の怠業で空いた時間を潰すため、奏雅は小さな店の立ち並ぶ通りに来ていた。

（こっちに来るのは初めてだな……やっぱり大抵の店は閉まってるか）

いつも暇つぶしをする場所とは別方向の通りで、新たな店の発見は無いかと散策している。大型店舗はこのあたりには無く、夜まで営業している店は数少ない。

（本屋……ないかな？）

顎に手を当、てどの方向に歩こうか考えようとして、あることに気がつく。

（あ、化粧落とすの忘れてた）

彼はカバンからハンカチを取り出し化粧を拭い取ると、手鏡で自分の姿をチェックした。

大きく胸元の空いた黒く光沢のある上着から少し覗くボタンを三つほど外した白いシャツ。キラキラ光る金や銀のアクセサリー。ま

だ化粧の少し残る顔は、なんともつまらなさそうな表情を浮かべている。その姿と、自身の身から発せられるキツイ香水の匂いに顔をしかめた。憧れと現在の自分の姿は近く、またかけ離れたものにも思える。

その時街灯により照らされたアスファルトに大きな影が映り、彼の影と重なった。

彼が驚き上を見るとふわふわな髪を両側で縛った学生服姿の女の子が眼に入る。

（なんで上から落ちてくるんだ……!）

瞬時に手鏡を投げ捨て、少女を受け止めようと手を伸ばす。

「わわっ、なんで人がいるの？ どけてくださーい」

想定外の出来事に体勢を崩した少女を間一髪で受け止め、優しく地面に下ろす。

「ケガは無いかな？」

奏雅は少女を怖がらせないように出来るだけ穏やかに尋ねた。

「あ、はい。大丈夫です」

中学生くらいに見える小柄な少女はぺこりと頭を下げる。

「で、なんで上から……」

奏雅が言いかけたところで少女が「あっ」と声を上げた。

「どうした？」

少女が指さす先には、奏雅が持っていた手鏡が転がっている。手鏡は地面に落下した際に割れてしまったようで、破片が数枚プラスチックの枠から飛び出し街灯のわずかな光を反射している。

「すみません」

少女がまたぺこりと頭を下げる。

「いや、別にいいよ。安物だし」

「そういうわけにはいきません。きちんと弁償します」

そう言われても中学生くらいの女の子の小遣いから弁償させるのは気が引ける。

「あ、お金なら気にしないでください。私の家、鏡屋なんです」

「鏡屋……？」

「鏡の専門店です」

「へえ」

仕事の収入で手鏡の買い替えぐらい訳無い彼だが、鏡屋に少しばかり興味が湧いたのでついて行ってみることにした。

（果たしてそこは新たな暇つぶし場所となりえるのだろうか）

そんなことを思いながら少女の歩幅に合わせ、夜道を二人でゆっくりと歩く。

「そういえば君、名前は？」

店までどのくらいの距離があるかはわからないが、黙ったまま一緒に歩くのも気まずいので話しかける。

「え？ 名前……ですか。えーと……」

名前を答えるだけにしては不自然な間が入る。

「言いたくなければ別に言わなくても良いよ」

「いえ、そういうわけでは……。えっと、シアです。栗田詩亜。あなた……？」

「結城奏雅だ」

「結城……」

詩亜は奏雅の姓を聞くと、わずかに反応した。

「どうした？」

「いえ、なんでもありません」

「ところでさっきはなんで上から……」

奏雅が本題に入ろうとしたところで彼女は声を上げる。

「あ、あそこです。私の家」

足の方かう先には古い木製の建物があり、内部は外見に反し数千年前に栄えた古代文明の遺産の様な神秘的な雰囲気醸し出している。

（こんな面白そうな店があったのか）

彼は無表情を保ってはいたが、内心は小躍りを始めそうなほど喜んでいた。

「ただいま」

まだ閉店前なのだろうか。詩亜は正面から堂々と明かりのついた屋内へ入る。

「あ、店長。おかえりなさい。今日は遅かったですね」

煌々と蝋燭で照らされた店内を若い女性店員（二十歳前後だろう）がぱたぱたと駆け寄ってくる。

女性店員の顔は整っており、綺麗というよりは可愛い感じでおっとりとした顔つき。髪は後ろで縛っており、地に足が着くたびにピコンピコンと揺れている。

「店長……？」

予想外の言葉に奏雅は驚きを隠せない。

「あら、お客様ですか？ それとも……お兄様？ まさか……恋人さんではありませんよねえ。店長にはこういうナイスガイ的な人はまだ早いと思いますよ。あ、それとも私に会わせよう、みたいな？ いやだな、まだ店長に心配されるほど……」

陽気な店員は一人で妄想を繰り広げていた。

「沙希さん、落ち着いてください」

詩亜は沙希と呼ばれた店員を落ち着かせようと肩を軽く叩いている。

「はっ！」

五回ほど肩をたたかれたところで沙希は我に返る。

「ごめん店長。もう大丈夫ですよ。で、あっちの方の客ですか？ それともこっちの方の？」

「沙希さん、あちらの方のことはアレだと何度も言ってるじゃないですか」

奏雅は目の前で繰り広げられる指示語だらけの会話に全くついて行けずにいた。

「すみません、奏雅さん。事情を説明しますので少々お待ち下さい」

二十歳前後の女性にまるで子供を諭すかのような口調で説明する中学生くらいの少女。それはそれで面白い光景だが、奏雅の興味は

店内の鏡へと移っていた。

少しの間、全身を映すような大きな鏡や獅子の飾りのついた鏡などを見て回っていると詩亜が奏雅のもとに寄って来て話しかけた。

「すみません、お待たせして。説明は終わりましたのでどうぞ手鏡を選んでください。一部のモノは訳あってお譲りできませんが大抵のモノならば大丈夫ですので値段は気にせず選んでくださいね。私はちょっと荷物を自室に置いてきますから」

そう言うとき詩亜はカウンターの奥に引っ込んだ。

「さあ奏雅さん。どれでも好きなものを選んでください。あつ、こちらの棚の上にある手鏡は残念ながらお譲りできませんのでご了承ください」

沙希が店内の一角にある棚を指さして言った。先ほど詩亜の言っていた「訳あり」の鏡なのだろう。

（興味はあるが……弁償とはいえタダで譲ってもらうわけだし無理は言えないか）

奏雅は店内を見回すとその棚の対角線上の棚に入ったデザインのものを見つけた。

それは銀色のフレームと翼のレリーフが特徴の小さな手鏡だった。

「じゃあ、これで」

「はい、わかりましたあ。どうぞっ」

店員は慣れた手つきで袋に入れると奏雅に笑顔で手渡す。

「どうも」

奏雅はそれを受け取るとゆっくりと出口に向かう。

「あれ？ もう帰るんですかあ？　せめて店長に一言くらい声を掛けてあげれば……」

「悪いな。用事があるんだ。まあ面白い店だしまた来るって詩亜に伝えといてくれ。鏡の礼は今度来た時に直接言うから」

そう言って奏雅は店を後にした。

（スーパーが閉まる前に、晩飯の材料を買わないとな）

奏雅の銀に煌めく腕時計は午後九時半を示していた。

第一話 少女と手鏡（後書き）

いかがでしたでしょうか。

一言でもいいので感想などを頂けると、やる気が出て更新が若干速くなるかもしれませんので、よろしく願います。

また、私の作品に少しでも興味を持たれた方がいらっしやいましたら、どうか他の作品もご覧ください。

第二話 手鏡と干渉

閉店間際のスーパーで食料品を買い込んだ奏雅は、学校用兼仕事用の高そうなカバンの中に購入した食料品を追加で詰め込んだ。彼の肩にはパンパンになったブランド物のカバンが掛かっており、手には先ほどスーパーで購入した豆の袋が乗っている。

奏雅は夜道を一人、豆をモグモグ食べながら家に向かって歩いていた。

（今日はひよこ豆。明日は枝豆。明後日は……）

大好物の豆のことを考えながら歩いていると、後ろから足音が聞こえてくる。それは歩きやジョギングの様なゆっくりとした走りのリズムではなく明らかに全力疾走しているものだ。

不審に思った奏雅は振り返り、足音の正体が近づいてくるのを待つことにした。

そしてそれは思ったよりも到着が遅かった。

「みいゝつうゝけえゝまあゝしいゝたあゝ」

聞き覚えのある声と共に駆けてきたのは沙希だった。

彼女は息を切らしながら必死に話を始める。

「……ずびば……ぜん……ぞうがざん……」

「落ち着け。とりあえず深呼吸して呼吸を整えろ」

そう言うのと彼女はそれに従い、深呼吸した。

「……大丈夫か？」

「はい、なんとか……」

まだ息を切らしているものの会話くらいは出来るようになっただろう。

「で、どうした？」

「さっきの手鏡なんですけど、私棚を間違えたみたいで譲ってはいけないものだったんですよう」

「これか？」

沙希の話を聞くと、奏雅はパンパンのカバンからその手鏡を取り出す。

「それですっ」

沙希は鏡を掴もうとしたが、奏雅がそれを頭上高く持ち上げた。

「なにするですかあー！ 返して下さいよう」

沙希の叱咤の声。

「別に返すのは構わんが譲れない理由くらいは聞きたいところだ。

あの棚には他にも多数の、それも新品の鏡があったから思い出の品ということでもなさそうだし、展示用のモノでもなさそうだったしな」

奏雅がそういうと沙希は瞳にうるうると涙を浮かべた。

「お願いしますー！ 何も聞かずに返して下さいよう。でないと私がつ、私がクビにいー」

演技ではなく本当に泣き出しそうだ。

「わかった、返すから泣くなって……」

そう言って手鏡を渡そうとした瞬間、街灯の光が何かに遮られ、周囲が闇に包まれる。

大氣に穴が空き、そこから生えてくるように巨大な獣の前足の様なものが徐々に姿を現す。

「なんだ……これ」

「あうう。クビ決定ですか……？」

驚く奏雅と絶望する沙希。そして……。

「沙希さん。クビにはしませんけど、さすがにこれは減給ですよ？」

奏雅たちの横に先ほどの獣の前足の様なものと同じように、しかしそれよりもずっと早く黒いローブを身に纏った詩亜が姿を現した。

「不幸中の幸いは標的が低レベルなことですね。沙希さん！ 『W

ーPー3』に『範囲干渉』お願いします。私が一撃で仕留めます」

「3ですか？ 1でもいいと思うんですけど……」

「今回は住宅街の真ん中で一般人もいます。沙希さんのせいなんですから少しの疲れくらい我慢してください」

「はあゝい」

繰り返り広げられる謎の会話の後、沙希は懷から手鏡を取り出して鏡面に触れる。するとそれは水面に滴が落ちた時のように小さな波を作った。波は振動を生み出し、それは鏡から半径数メートル以内の場所を包みこんだ。

すると景色が歪み、先ほどまで立っていた風景とは似ても似つかない、サファイアのような色と黒色の渦巻く場所に立っていた。地面の感触はあるが視覚的に確認することができない。上下左右前後、広がるのは無数の渦の景色のみだった。

奏雅がその景色に目を丸くしていると、先ほど突如現れた足の本体が穴を広げて姿を現す。その姿はオオカミやクマのようでもあるが、濡れた漆黒の翼、一列に並んだ四つの紅蓮の眼と二つの口、なによりも十メートルはある巨大な体がこの世のモノではないことを彼に悟らせた。

「クレンシア、早くしてくださいよう。私、防御世界は苦手なんですからあ」

「わかってますよ。では……」

詩亜が腕を前に突き出すと金の輪が大小の二つ、出現し小さな拳の先に浮かんだ。

大きいほうの輪が小さいほうのモノよりわずかに前方に移動すると、どこからか光が拳に収束し始める。

その様子を見たバケモノは自分の身が危険に晒されていることを悟ってか、事が起こる前に自分を脅かす発生源に向かって突進した。二つの口からは牙と粘りのある唾液が見られ、奇妙な鳴き声が発せられている。

「行きますっ」

詩亜が正面から走り来るバケモノに巨大な青白い閃光を放つ。閃光は徐々に細くなり、やがて詩亜の拳から光が消えた。

バケモノは苦痛の表情も断末魔の叫びも残すことなく消滅した。奏雅の眼に映るのは奇妙な空間と二人の女性、それと果てしなく遠

くを突き進む青白い閃光のみだった。

「沙希さん、帰りましょう」

詩亜は平然とした様子で口を開く。

「また広範囲干渉ですかあ？ 嫌ですよ、疲れちゃいますもん。奏雅さん、ここで暮らしませんかあ？」

「……え？ いや……」

周りで起こった出来事を理解できずに呆然と立ち尽くしていた奏雅はうまく反応が返せなかった。

「広範囲って……。たった半径数メートルじゃないですか」

「ならクレンシアがやってくさいよう。私はリスのようにか弱いんですから」

沙希はほったを膨らませて文句を言った。

「わかりました。ではお給料の方はマイナス十パーセントのところを、十五パーセントにしておきますね」

詩亜は沙希にこやかに告げる。

「ええっ！ 待って、ストップ、うえいとあみにつっ」

詩亜が沙希の声を無視して手鏡を取り出し、先ほどの沙希と同じように鏡面に触れると周囲が振動して元の住宅街の景色が目の前に広がる。

「すみません、奏雅さん。怖い思いをさせてしまって。今記憶から消しますから」

詩亜は手鏡に再び手を伸ばす。

「待った」

奏雅は手を伸ばし、鏡に触れさせないように詩亜の手を取った。

「どうしました？」

詩亜はきょとんとした顔で奏雅を見る。

「状況説明を頼む」

奏雅は詩亜の手を離し真剣な眼差しで彼女を見つめる。

「頼む」

もう一度言々と詩亜は「わかりました」と頷いた。

「この鏡は様々な世界に干渉する能力を持っています。人の心の世界や想像の世界、妄想の世界。本の世界や異なる次元の世界などまだありますが」

詩亜は持っている手鏡を見せながら説明を始める。

「過去や未来の世界にも？」

「いえ、時間軸の移動はできません。そもそも私の言う世界の定義は曖昧なもので、さらに不変ではありません。世界は世界が重なったものであり、それらを構築しているものも世界なのです」

奏雅は詩亜の言うことがよくわからなかったがとりあえず頷いておくことにした。

「先ほどのアレは心の掃き溜めの世界に積もった負の感情が作り上げたモノが偶然干渉能力を得て、この世界に來たモノです。偶発的に得た干渉能力は不安定で、力を安定化するためにその手鏡に引き付けられたのだと思います。それと私が使った力も結論から述べる」と鏡の恩恵だと言えます」

そう言って詩亜が奏雅の持つ手鏡を指さした。

「つまりこの手鏡は詩亜の持っているのと同じ干渉能力を持つ鏡だと……」

詩亜はコクンと頷く。

「だから一般人には渡さない、と……」

「はい。普段あの店には、一般のお客さんはほとんど来ませんから、沙希さんは棚を間違えてしまったんだと思います」

沙希は詩亜の隣でコクコクと力強く頷いている。

「いくらだ？」

奏雅が唐突に話を切り出す。

「……はい？」

「いくらならこの手鏡を譲ってくれるんだ？ 売り物なんだろう？」

詩亜は困ったように返事をする。

「お金は別に良いんですけど、危ないですよ？ さっきのアレは最下級レベルですし、他の世界に干渉したらもっと危ない目にも遭い

ますし、他にも……」

「構わない。だからコイツをくれないか？」

奏雅は手鏡を見つめて詩亜に告げる。

（これがあれば、ずっと憧れていたヒーローになれる）

鏡にはキラキラ輝く奏雅の瞳が映っていた。

「わかりました」

詩亜は仕方なくそう返事をした。

第三話 干渉と異世界

非日常的な出来事の翌朝、奏雅は再び鏡屋に足を運んでいた。例の手鏡をもらう約束をしたが、最終メンテナンスを行うと言うので詩亜に預けてあったのだ。

「いらっしやいませ。あ、奏雅さんじゃないですかあ」

店内に入るなり沙希がパタパタと駆け寄ってくる。

「しいちゃん！ 奏雅さんが来ましたよー！」

沙希は店の奥の扉に向かって声を掛ける。

「はい」

詩亜は返事と共に店の奥から姿を現す。

「こんにちは、奏雅さん」

彼女は軽く頭を下げると沙希の方を向いた。

「沙希さん。しいちゃんはやめてください。もう子供じゃないんですから」

「じゃあクレンシアちゃんです」

「だからちゃん付けは……」

二人の雑談が盛り上がる中、奏雅が口を開く。

「なあ」

「あ、すみません。鏡は奥の部屋に置いてありますのでどうぞ上がってください」

詩亜が笑顔で店の奥へと奏雅を案内する。

「あ、うん。ところでなんで沙希は詩亜の事を『クレンシア』って呼ぶんだ？」

詩亜について行きながら疑問を口に出す。

「それは栗田詩亜はこの世界での偽名だからです。『クレンシア』も本名を短縮したコードネームなんですけど……。ちなみに私の本名は『クリケルト・レンディア・シエテア』です」

「えっと、やけに長いのはミドルネームとかか？」

「いえ。私は幼い頃に一人でこの世界に来たので詳しいことはわからないのですが、それぞれ意味があるらしいです。名づけるなら『クーリケルト』が鍵名、『レンディア』が姓で『シエテ』が名前、『ア』が音名^{おしな}ってところですね」
彼女は明るい口調でそう言った。

「つまり…詩亜で良いってことだな？」

奏雅がそう言うのと詩亜は笑いながら頷いた。

店の奥の扉を開けると、神秘的な店内とは真逆の生活感漂う光景が目に入る。畳にちゃぶ台、テレビといったごく普通の日本家庭のようである。

「沙希は本名なのか？」

靴を脱ぎながら詩亜に尋ねる。

「私の本名はサキ・イーヌテリアですよ。こっちでの偽名は犬井沙希です」

詩亜が口を開く前に店内にいる沙希が声をあげて答えた。

「だ、そうです。それでは鏡をお渡ししますね」

詩亜はちゃぶ台に置いてあった手鏡を持ち上げ奏雅に差し出した。

翼のレリーフがキラリと光る。

「では少し長くなりますが説明をさせていただきますね」

奏雅が手鏡を受け取ると、二人は畳の上に座った。

「まずは所有者の登録を行ってもらいます。登録と言っても鏡面に触れるだけなので今実際にやってみてください」

言われた通りに鏡面に指先を押し付ける。しかし指は固体に当たることなく通り過ぎ、鏡面に波紋を生み出した。指は粘性の低い流体を触れている様な感覚である。

「はい、登録完了です。これでその鏡は奏雅さんしか使えません。次はスキルについての説明です」

奏雅は手鏡から指を離し、熱心に詩亜の説明に聞き入っていた。

「スキルとは手鏡と所有者が共に在ることで発現する能力のことです。まず一つ目は固定スキル。これは干渉能力を得ることで、手鏡

の所有者は例外なくこのスキルを使えます。二つ目は潜在スキル。所有者の深層心理に干渉することで引き出されるその個体の根源的な力です。例としては『せっかちな人の足が速くなる』などです。基本的には目立つ能力ではないので自分の潜在スキルを知らない人がほとんどです」

ここまで一気に喋り、詩亜は一呼吸置いてからまた話し始める。「三つ目は自由スキルです。所有者が想像した力を発動できます。ただしこれは最初に想像を登録する必要がある、後での変更はできません。よく考えてから登録してください。方法は鏡に触れた状態で能力を強く想像するだけです。ちなみに能力の強さは所有者の強さに依存します。弱い人が『星を砕く力』と想像してもその辺の石ころが砕ける程度です。ただ所有者が強くなればスキルの力も向上します。ですのでこのことも参考にして能力を想像してください。それとスキルではありませんが、鏡が使用者の深層心理に干渉することで身体能力が飛躍的に向上します。また鏡が構築する世界に干渉することです。そこに荷物を置いておくことができるので是非活用してくださいね」

詩亜は説明を中断し「お茶を入れてきます」と言って席を立った。
(自由スキルか……。ヒーローに必要なのは、アレしかないよな)
奏雅は指を鏡に触れ、強く想像した。

(俺の望む能力は……。『変身』だ)
鏡はその想像に反応して一瞬光を放った。

「あれ？ 自由スキル、もう決めちゃったんですか？」
お茶と煎餅を持ってきた詩亜が奏雅に尋ねる。

「ああ、決めたよ」
奏雅は即座に答えた。

「どんなのにしたんですか？」
奏雅の答えを待つ詩亜の目は輝いている。

「それは……。秘密だ」
変身などと言ったらどんな反応をされるのだろうか。彼は少し恥ず

かしくなり目を背けて誤魔化した。

「まあいいです。それでは少しばかり注意しておきます。後々詳しく説明しますが慣れるまでは本などの物語りや人の心のような実在しない世界には危険ですので干渉しないでください。また事故で予期せぬ世界に干渉してしまった場合は速やかにこちらの世界に帰って来てください。それと昨日のようなバケモノに出くわした場合は一人では戦おうとせず私に連絡をください。やむを得ず戦う場合は後でやり方を教えますが昨日沙希さんがやったように防御世界に干渉して周囲への被害を防ぐこと。とりあえず今は以上です」

その後も夕方まで説明や禁止事項などが延々と述べられたが、奏雅は飽きることなく聞いていた。

日はすっかり沈み、あたりは闇に包まれていた。入り混じる草と土の匂いが鼻を突き、乾いた冷風が肌を刺す。見知らぬ土地で、頼りになるのは星の明かりのみ。

結城奏雅は数分前、初めての干渉を行った。

どこの世界なのか、人はいるのかなど浮かぶ疑問は絶えない。不安になりつつも、帰ることはいつでもできるので少しあたりを見まわってみることにした。

どうやらここはどこかの山の中腹あたりらしい。暗闇の中、右側に上り坂、左側に下り坂がわずかに見える。

奏雅は山の麓を目指して下り始めた。集落があるならば山の上よりも麓にある確率が高いと思ったからだ。

少し下ると、赤く揺れる光が山から漏れ出しているのが見えた。

（洞穴に火の明かり……か。異世界でも干渉能力があれば言葉は通じるって詩亜が言ってたけど、言葉そのものはあるんだろうか）
そんなことを考えながら彼は洞穴に向かった。

内部は思ったよりも広く、数十人の上半身裸の筋肉質な男達が炎

を囲み踊っていた。

奏雅が足を踏み入れると男たちはそれに気づき、その中の四人が武器を持ってやってきた。

「なんだお前は、どこぞの騎士団の手の者か？　それとも賞金稼ぎかあ？」

一人の男が斧を振り上げて威嚇する。

「まさか一人で、それも丸腰で乗り込んでくるとはな」

今度は鎖のついた鉄球を持った男が一步前が出る。

「お頭、殺^やっちゃっても、問題ないな？」

小柄な男がナイフを握りしめて言った。

「ああ、殺せ」

四人の中で最も背が高く筋肉のついた男が頷くと、三人で一斉に襲い掛かってくる。

奏雅はそれを見ると手鏡に触れ、鏡面から細めの長剣を取り出し刃の側面で、武器を振り上げる男達の手首に打撃を加えた。三人の男達はその衝撃で武器を取り落とした。

奏雅の剣は手鏡の世界に置かれていたもので、詩亜の話によると潜在スキルと自由スキルが確定した時点でそれに応じた武器が手に入るようにプログラムされているらしい。一昔前にはなかった機能だが武器の入手が困難になった現在、急遽作られたものである。

「この野郎っ！」

武器を落とした男の一人が間髪いれずに奏雅に殴りかかる。奏雅はその拳を右手で払い長剣の切先を男の喉に突き付ける。男は腰を抜かしてその場に尻もちをつき、武器を落とした他の二人は戦意喪失し、頭の顔を見ている。

「小僧、目的はなんだ？」

頭は落ち着き払った口調で、しかし凄みを利かせた表情で尋ねる。

「俺はなんていうか……旅の途中でな。この辺りに村とかないか？」
確かに奏雅の目的は集落を探すことだった。しかしそれは先刻までのことであり、今の彼には別の目的ができていた。

「村だと？ はっはっは！ 悪いな、それならさつき焼いちゃったぜ！」

頭は品のない笑い声を上げる。

（やはりか……）

見るからにガラが悪く、手の早い山賊のような輩が宴を開いて踊っていたとなれば、それを可能性の一つとして考えるのは自然のことだ。

「そうか。ならば村人たちの無念、今ここで晴らそう。断罪の時だ。月下に花咲く薔薇と成れ！」

奏雅は剣を構えてそう言った。

第四話 異世界と騎士団

奏雅が剣を構えると、洞穴の内部で成り行きを見守っていた数十人の男達が一斉に武器を持って立ち上がり、入口に向かってきた。しかし、彼らは武器を構えてはいるものの、襲い掛かってくる気配はない。

「おい、何してやがる！ さっさとこいつを殺しちまえ！」

頭は構えたまま動こうとしない男達に一喝した。

男達がその声にオロオロしている中、その中の一人が口を開く。

「お頭、そいつの動き、見なかったんですかい？ あの三人に触らせることなく……強すぎますぜ」

「テメエらこそ、見てなかったのか？ そいつの動きは確かに速いが、どう見ても素人のそれだ。その証拠にそいつらの腕を見てみな」

頭が先ほどの三人を指差した。男達と奏雅がその三人の腕を一斉に見ると、そこには紅い歪な曲線が刻まれていた。

「そいつに斬るつもりが無かったのはわかるな？ だからそいつは刃を横に向けた。それにもかかわらず、そいつらの腕は切れている。その傷は慣れない剣の扱いと、横に向けた時の風の抵抗による手元の狂いが原因だ」

彼の言うことは当を得ていた。手鏡の力で身体能力が格段に上がっているとはいえ、剣を振るうことはおろか、喧嘩すらまともにしたことが無い奏雅が、実戦において完璧な攻防ができるはずもない。「つまり……人海戦術で責め続けられ、必ずボロが出るはずだ。テメエら！ 素人が俺達のアジトに単身で乗り込んできたことを、死をもって後悔させてやれ！」

頭の言うことに納得したのか、男達はそれぞれ大声を上げて奏雅に向かい駆けだした。

（さすがにこの数が相手では……）

圧倒的速さで攻撃をかわすも、周りを囲まれた状況での無数の攻

撃に、反撃する余裕は彼にはない。

雨のように武器が奏雅に向かって降り注ぐ。武器はこん棒、鉄球、短剣など実に様々である。

「頭の言った通りだ！　こりゃあ罫り殺しだぜ！」

下品な笑い声が聞こえる中、弱まることのない攻撃の嵐。

奏雅は頭上から迫りくる鉄球を左に避け、しつこく狙うこん棒の追撃を後ろに下がり、空振りにさせた。しかしその時、背後から勝ち誇ったような声が上がる。

「もらったあー！」

奏雅の背中に向かって一直線に飛び出す男の声。その手にはキラリと切っ先の光る短剣が握られている。

男達の歓声が上がる。同時に短剣の刃先が奏雅の背中に接触する。

「くっ、しまった……！」

しかしその刃が刺さることは無く、代わりに奏雅は全身に強い痺れを受けた。

「あれ？」

奏雅は背中を触るも、血が着くどころか服すら無傷だ。

それを見た男達は攻撃の手を止め、訳がわからない、といった表情で立ち尽くしている。そして、それは奏雅も同じだった。

「小僧……干渉者かっ！」

静寂を突き破り、頭は声を荒げて奏雅に問う。

その問いに対し、奏雅は答えることに躊躇する。詩亜には干渉先の実在する世界では、極力干渉能力について秘密にしてほしいといわれている。スキルを発動しないのもそのためだ。だが相手が干渉について知っている場合はどうなのだろうか。

「お頭！　なんですかい？　その干渉者ってのは」

先の刃物を持った男が頭に尋ねた。

「俺も詳しくは知らねえ。だがついこの間、そう名乗る奴が隣の国に現れたらしい。そいつはコイツと同じように、刃物で攻撃しても傷つくことが無かったそうだ」

（聞いてないぞ……詩亜）

刃物によって刺される、あるいは斬られるというのは、小面積に強い力が掛かることによるものである。干涉者は身体に加わる圧力を体全域に分散する能力がある。それ故に傷を負うことは滅多になるが、全身を鈍器で殴られたような衝撃を受けることになっている。「フン。傷つくことは無くても、効いてないってことはなさそうだな」

頭は奏雅の痛みに顔を歪めた一瞬を見逃さなかった。

「便利な能力だ。だが哀れな力でもある。なんたって、楽には死ねないんだからなあ！ 野郎ども、攻撃の手を休めるな。この小僧をブチ殺せえー！」

頭の号令と同時に男達は再度、奏雅に襲いかかった。奏雅は降り注ぐ攻撃を、初めは前後左右と巧みにかわしていたが、戦い慣れしていないため無意識に規則的に避けるようになってしまう。

防戦一方の攻防が続き、三度目、右の後に左へかわした時だった。

「死ねえっ！ ザコがあ！」

一人の男の攻撃が、ついに奏雅をとらえた。背中への鉄球による一撃に、体全体の痛みを感じ、その動きが止まる。その刹那、男達は奏雅に集中攻撃を浴びせた。

怒号と共に、男達はそれぞれの武器を、奏雅に叩きつける。

（……まずい……意識が、遠のく……。調子に、乗りすぎたかな……）

奏雅は攻撃を受け続け、ガックリと硬い地面に膝を着いた。

「お頭っ！ 大変ですぜっ！」

その時、洞穴の外に居たであろう男達の仲間が、慌てて駆け込んできた。

「騎士団がつ、騎士団がこのアジトに向かってやって来やがった！ 見張りであろうその男は声を荒げて訴える。

「騎士団？ この辺りの騎士団など、俺達に刃向かうことのできない腰抜け揃いだらう。どこの国のだ？」

奏雅が攻撃を受け続ける中、二人が会話している。

「それが、フルーエル騎士団のようで、一番隊隊長のザイレイーフ
イエルが先頭を歩いて……」

「何だっ!」

頭が大声を上げると、男達は攻撃の手を止めて、会話中の二人に
注目した。

「野郎共! 今すぐこのアジトを捨てて逃げるぞ!」

頭の突然の撤退宣言に、男達は眼を丸くした。

「奴だ! 『炎鬼のザイレイ』がここに向かってやがる!」

その言葉と共に、洞穴の中は騒然となった。

「ザイレイーフイエルだと? 冗談じゃねえ!」

「奴に関わるなんて、地獄に行くのと同義じゃないか!」

男達は、一斉に荷物をまとめ、ばらばらに洞穴から駆け出ていく。

「小僧、命拾いしたな。これに懲りたなら、二度と俺達の前に姿を
現すな。次は……殺すぞ」

頭が、男達が出て行った後、最後に残ってそう言った。

(……助かったのか? 俺は……)

奏雅の霞む視界に、去っていく頭の姿だけが映る。やがて、奏雅
はゆっくりとその目を閉じた……胸に敗北の悔しさを抱きながら。

ゴツゴツした岩の上。その寝心地の良いとは口が裂けても言えな
いであろう場所に、奏雅はうつ伏せに身を横たえていた。

体中が、これまで経験したことのない痛みに襲われている。足や
腕はおろか、脛すら動かすのが億劫だ。しかし、辛うじて意識はあ
るようだ。彼の耳に、いくつかの話し声が聞こえてきた。

「静かだな。奴ら、勘付いて逃げ出したのか?」

男の事務的な低い声。

「そのようですね。ザイレイ隊長、どうでしょう?」

今度は高い声。女性ではないが、声変わりした男の声には聞こえない。

「ほっとけ。俺は戦う意思が無い奴らに、興味ねえんだよ」

そして、リズムに乗せて話している様な錯覚すら覚える、元気な若い声。

「まさか隊長……勘付かれたの、わかってました？」

「勘付くって……。思いつき見張りが見てたじゃないか」

高い声の主の責めるような口調に対し、ザイレイは軽快に笑って答えた。

「なんで対処しないんですか！ 今回の山賊討伐の任務、失敗じゃないですか！」

「失敗じゃねえよ。今回の任務は山賊鎮静化だ。討伐じゃねえ。戦いもせずに逃げる奴らなんぞ、戦ったって面白くないんだ。ならば無駄に殺し合う必要もないだろう」

声の主たちは、コツ、コツ、と足音を鳴らし、洞穴周辺を調査するように歩きまわっている。どうやら洞穴周辺に居るのは三人で、他の者はどこかで待機しているようだ。

やがて、それらの声が、奏雅に大きく聞こえるようになってきた。洞穴内部に足を踏み入れたのだ。

「ん？ おい！ 誰か倒れてるぞ！ 大丈夫か？ 君！」

大声を出し、駆け寄ってきたのは、事務的な声の主だった。

「……うう……」

肩を揺らされた奏雅から、低いうめき声が漏れる。

「状態は？」

ザイレイが辺りを見渡しながら尋ねた。

「見てわかる傷はありませんね。骨折、内臓破裂などもなさそうです」

事務的な声の男は、奏雅の体を観察、触診し、答えた。

「そうか……。ならば、城に連れて帰れ。事情を聴く必要があると思うだ。……どこから来たのか……とかな」

ザイレイは口の両端を軽く上げ、そう言った。

第五話 騎士団と仲間（前編）

晴天の朝、強い日差しが、奏雅の閉ざされた視界を赤く染める。朝の訪れをその身で感じるも、体が重く、腕どころか瞼すら上がらない。

「……うう……」

体に力を入れると、渴いた喉からうめき声が漏れる。

「よう、起きたか？」

奏雅は、聞き慣れない声に警戒心を抱き、重い瞼を強引にこじ開け、動かなかった体を無理やり起こす。

見慣れない部屋だった。豪華な装飾が施され、窓から入って来る明かりが燦々と煌めく。純白の壁、紅い絨毯が、光を反射し、宝石箱の中に居るような錯覚すら覚える。そして、その部屋の中には、一人の男が居た。

橙色の、肩まで届く癖のある髪。白色に青のライン、金の装飾の入った服。面構えからは、まるで小学生の様に活発で、常に楽しそうな印象を受けるが、一方で鋭い目が大人な雰囲気醸し出している。奏雅と同年代のようだが、彼からは静かに放たれる威圧感があった。

奏雅は状況を整理しようと、まだ重い頭を働かせた。

（どこまで記憶がある？ 干涉先の世界で道を聞こうと、洞穴に入った。しかしそこは、山賊の様な奴らのアジトで、彼らと戦ったが……負けた……。その後は……）

奏雅は男の顔を観察し、記憶を手繰り寄せた。

（顔は見なかったが、コイツのさっきの声……。確か、洞穴で聞いた気がする。コイツの仲間はなんて言ってた？ 思い出せ。確かコイツは……）

「ザイレイルフィエル」

思い出した名を口に出すと、男は驚いたような顔をした。

「なんだ？ あの時、記憶があったのか？」

ザイレイがそう訊くと奏雅は、微かにな、と頷き答えた。

「で？ どこから来たんだ？ お前は」

口の端を上げて尋ねるザイレイと、返答に困る奏雅。二人がしばらく無言で見つめ合った後、ザイレイが口を開く。

「訊き方がまずかったか？ ならば……お前はどこの世界から来た？」

奏雅は深いため息をついた。この世界の人々にとっては、干渉者は身近な存在なのだろうか。

（正体を隠しておくのがヒーローだというのに。あの頭といい、コイツといい……）

「なんだ？ 世界って……。俺はこの……」

彼が言いかけた時、ザイレイはクスクス笑い出した。

「下手な嘘だな。自分の格好の違和感に、気付いてないのか？」

そう言われると、奏雅はベッドから鉛のように重い体を起こし、自分の服を見つめた。いつもの仕事用の服……黒い光沢のある、フォーマルな上着に、胸の大きく開かれた、白く、襟の目立つシャツ。

「この世界には、そんな服を着てる奴なんていないぜ？」

活発な少年の様な、ザイレイの無邪気な笑み。それとは対照的に、そんな初歩的なことにも気付かなかった奏雅は、ショックを受けた顔をしていた。

「はははっ。そんな顔をすんなよ。俺は別に、お前がどこの世界から来ているかが興味無いんだ」

ザイレイの眼が、スツと細くなる。鋭い、真剣な眼差し。

「俺は戦いたいだけさ。強い奴と。以前俺が剣を交えた干渉者のような強敵と」

ザイレイはそう言いながら、剣を抜いた。正確に言えば、腕にはめた。円筒状の金属の先端に、中型の刃がついている剣だ。左手には、燃え盛る炎のような、鬼の様な顔がついた何かが、装備されている。

「剣を抜けよ……干渉者」

降りかかる威圧感。奏雅は軽く震え、その肌には鳥肌が立った。

そこに、ドアを開けて入って来る者が居た。

「失礼します。食事を届けに来ました。彼は目覚めましたか？ ……」

…って、ザイレイ隊長！ 何をしてるんですか！」

湯気の立ち上る、良い匂いをさせたお盆を近くの棚の上に置き、慌てて止めに入る少年。女性のショートヘアのような金髪。中性的な顔ながらも、芯の強そうな金の瞳。細い体つきとピカピカな鎧が、ザイレイとは真逆の雰囲気醸し出している。

「邪魔をするな、リューセクトル。別に殺し合いをしようってわけじゃない。試合だ、訓練だ」

面倒そうに、しかし真剣な眼差しを奏雅に向けたまま、ザイレイは言った。

「ちょっと！ この人、一般人じゃないですか！ 隊長と試合なんて……！」

少年は、あくまでも戦いを止めるつもりのようなだ。ここで奏雅が「戦いたくない」と言えば、ザイレイも剣を収めざるを得ないだろう。

（炎鬼のザイレイ……俺を倒した山賊達が恐れた、騎士団の隊長……）

奏雅は拳を作り、力を込める。

（戦いたい！ 一対一ならば、俺がどこまで通用するのかを知るために！）

少年にガミガミ怒鳴られていたザイレイは、奏雅の拳を見て、不敵な笑みを浮かべる。

「リューセクトル。アイツはやる気だぜ？ 無論、俺もな。双方、合意の上での試合だ。お前に止める権利はねえぞ」

「ありますよ！ どこでやるつもりなんですか？ 総隊長に知られたら、僕まで怒られるんですよ？」

ふたりの口論が続く中、奏雅は手鏡を取り出す。

「場所ならあるさ。その総隊長とやらにも知られない場所が」

空気が振動し、奏雅の声が震えて聞こえる。光の波紋が、奏雅を中

心に発せられる。

「アドレス『ワールド・オブ・プロテクト レベル1』に個体干渉対象三名」

奏雅は声を出しながら、鏡に触れ、強く念じる。そして、大きく息を吸った。

「防御世界『W－P－1』に干渉、開始する！」

奏雅、ザイレイ、リユーセクトルの体が発光し、粒子となって消えていく。

数秒後、彼等は青色と黒色の渦巻く空間に姿を現した。

「これは一体……？」

リユーセクトルは周りを見て、驚きの声を上げる。一方ザイレイは、奏雅に対峙したまま、眉一つ動かさない。

「リユーセクトル、ここは異世界だ。ヤツに知られる心配はない。問題解決だな？」

ザイレイの低く、脅すような、威圧感のある口調。実際に脅している訳ではないが、戦闘態勢に入った緊張感が、そうさせているのだろう。

リユーセクトルは反論しようと口を開きかけたが、良い言い分が見つからず押し黙ってしまった。

「そういえば干渉者、お前の名、まだ聞いてなかったな」

「結城奏雅だ」

奏雅は細身の剣を、相手から剣と体が十字に見えるように、水平に構える。ザイレイは、右腕にくっついた剣を斜め下に力無く下げ、左腕についている炎の鬼を前方に向かって突き出している。

「隊長！ 炎鬼まで使えますか？」

「黙って見てろ。……先手をくれてやる。来い！ 結城奏雅！」

責める口調のリユーセクトルを一蹴し、奏雅に向かって声を荒げる。奏雅は地を蹴り、高速で間合いを詰める。瞬きすら許さないような踏み込み。腕や剣に受ける風圧で、軸がブレながらも、疾風のごとき一撃を振るった。

「……遅いな……」

そう聞こえた気がした。

奏雅が剣を振り下ろした先に、ザイレイの姿は無かった。手ごたえの代わりに、全身の痺れを感じる。

（後ろか！）

痺れは背中の方が少々強かった。ゆえに、敵は背後に回ったと判断した奏雅は、勢いよく振り返る。

「……ふっ……！」

頭上から聞こえる微かな気合いの声。同時に、頭部への斬撃。今度は痺れだけではなく、全身に痛みも受ける。眼前には、またしてもザイレイの姿は無い。

奏雅の頬を、冷たい汗が伝って落ちた。表情からは焦りの色が滲み出る。

（ヤツは常に、俺の背後にいる……！）

「ウオオオオオ！」

掛け声と共に、大きくバックステップを踏む。加速と共に体をねじり、大きく薙ぐ。

しかし、まるで当然のように敵の姿はそこに無く、全身に鈍い痛みが走る。

「……素人だとは思っていたが、ここまで弱いとはな……」

奏雅が声のする方向、即ち背後を向くと、炎の鬼を突き出しているザイレイの姿が目映る。

「勝負を挑んでおいて、期待通りでは無かったから中止では……失礼だろうな。仕方ない、倒すか」

鬼が口を開くと、空気がそこに流れ込む。中から発せられている熱は、数メートル離れた奏雅にも感知できた。

（なんだ……アレは！）

「行くぞ……奏雅！ 炎鬼爆碎！」

ザイレイは奏雅に高速で接近し、鬼の口から巨大な炎が打ち出した。（避けれない……！）

間近に迫る炎に、目をつぶる奏雅。

一秒、二秒……三秒経っても、身が焼かれる気配はない。奏雅は恐る恐る目を開いた。

「何してるんですかぁー、奏雅さん」

巨大な炎を圧縮し、打ち消す沙希の姿があった。

第六話 騎士団と仲間（中編）

立ち尽くす奏雅の眼に映るのは、純白の布地に、薄い青色の装飾が施されたローブを着た女性の後ろ姿。どこからか急に現れた彼女の、束ねられた髪は、炎を圧縮した際に生じた風でフリフリと宙で揺れている。

ほどなくして風がやむと、彼女は振り向き、瞳を潤させて言った。

「また私のお給料を減らす気ですかあ？ 奏雅さんは知らないでしょうけど、私はいいちゃんに、奏雅さんが慣れるまでの間のサポートを頼まれているんです！ それなのに、こんな危ないこととして！ これ以上減給されたら、毎日のイチゴパフェが……週六に……！ いや、ないない。さすがにそれは、耐えられませんよ」

猛烈な勢いで語り始める沙希に、奏雅はため息をついて呆れる。それに対し、騎士団の二人は眼を見開き、驚いている。

やがて、ザイレイの口の端が徐々に、横に広がっていく。それを見たりューセクトルは、顔がどんどん青ざめていく。

「隊長……。まさか、あの人にまで戦いを挑むなんてことは……」
彼が言葉を言い終える前に、ザイレイは既に地を強く蹴っていた。

「キサマ……俺と戦え！」

一瞬で間合いを詰め、ザイレイは沙希に斬りかかる。

「え？ ちょちょちょ、ちょつと。何なんですかあー！」

沙希は、ザイレイの大きく振りかぶった一撃をかわし、大きく後ろに跳び退き、小さく指を上から下に振り下ろす。すると、ザイレイは頭に衝撃を受けたかのように、前のめりに倒れた。

「面白い！ 炎鬼、アレやるぞ！」

すぐに起き上がったザイレイは、左手の炎鬼を上に掲げる。燃え盛る紅の炎は、紫色へと変わり、鬼の顔は、徐々に獅子へと変化する。
「行くぞ！ 紫炎獅子！」

開かれた獅子の口から、巨大な紫の炎が、沙希目掛けて放たれる。

「沙希っ！ 危ない！」

奏雅の叫び声は、静かな空間に響き渡った。炎が発する、空気を燃やす轟音の無い、静寂な空間に。

巨大な紫の炎は、沙希の手により一瞬で締められ、すぐに消えていた。

「いい！ 最高だぜ、アンタ！」

ザイレイは高速で走りながら、再び斬りかかる。

「もう、なんなんですか、あなたはぁー！ 強制送還、個体干涉！ ターゲット二名……変な人とその仲間！」

沙希がそう言って鏡に触れた瞬間、剣を振り上げたザイレイと、終始固唾を飲んで見守っていたリユーセクターが、光に包まれ消え去った。

彼女はため息を一つ漏らし、パタパタと奏雅のところに駆けて行った。

「それで、どういった経緯で、こんな訳のわからない状況になったんですかぁ？」

奏雅は眉間にしわを寄せ、説明することを躊躇っていたが、ぷくっと頬を膨らませ、不満気たっぷりの目で睨む沙希に気圧され、経緯を説明することにした。

「……なるほど」

沙希は話を聞き終えると、温か味の無い笑顔を浮かべ、頷いた。

「つまり……。ちょっとした好奇心から一人で勝手に、適当な世界に干渉して、警戒なんてほとんどしないで変な人たちに近づいて。それが山賊で、多勢に無勢でもプライド的に逃げたくなくてボコボコにされて。で、運良く助けられたは良いものの、名前だけで山賊達を退散させるような助け主に勝負を挑まれ、無謀にもそれを受けて、またボコボコにされた……と」

笑顔のまま、沙希は悪意に満ちた口調で要訳を言い、ブツブツと小言を呟き始めた。

「沙希。実は知る人ぞ知る、イチゴパフェの美味しい、隠れた名店

が近所に在って……」

奏雅が言ったその言葉で、沙希はピクツと反応し、動かしていた口を止めた。

「ワタシ、ナニモミテナイ。ナニモ、モンダイナカッタ」

沙希は少し考えた後、片言で言った。

「よし、今度連れてってやろう」

「わーい。じゃ、さっそく帰って食べに行きましようかあ」

沙希は奏雅の腕を取り、手鏡を取り出した。しかし、そこで奏雅が制止した。

「帰らないんですかあ？」

沙希が問うと、奏雅はゆっくり頷く。

「このまま、良いトコ無しで帰れるかよ」

奏雅は腕を振り払い、顔を背けて言った。

「まあ、だ懲りてないんですかあ？　しょーが無い。少しくらいなら付き合いますよう」

それに対し、沙希は呆れたような口調で答えた。

「いや、要らない。もう保護者の同伴が必要って歳でもないしな」

奏雅の答えに納得のいかない沙希が、口を開く。

「でも……」

「イチゴパフェ」

「お氣をつけてえ」

沙希は、不満気な顔を一瞬で満面の笑みに変え、大きく手を振った。そして、手鏡に人差し指を近づける。

そこで、奏雅が声を掛けて引きとめた。

「沙希。そういえば、あの『炎鬼』とかいうの、なんなんだ？」

眉間にしわを寄せ、ここには長居したくないとでも言いたげな視線を送るも、イチゴパフェのことがあるからか、素直に答えてみせた。

「んー。フィンリエ……は私の世界の言葉だし。精霊……が近いですかねえ」

その答えに、今度は奏雅が怪訝な顔をする。

「精霊？　おい、マジメに答えろ」

「マジメですよ！　あのですねえ、異世界に来るなら自分の世界の常識は捨てないとか。あの変な人達の世界は、物理法則とか人の姿とかが共通してるだけ、マシなんですよお？」

沙希が子供に言い聞かせるような口調で言うと、奏雅は口をポカンと開けた。

「世界が違うと、物理法則まで違うのか？」

「そういう世界もありますよう。不安定な世界は消滅するので、現存する世界の法則には、ある程度のパターンがありますけど。ま、それはそれとしてえ……この防御世界には長居したくないので、私、帰りますよお？　あ、イチゴパフェの件、忘れないでくださいねえ」

言い終えたときには、すでに沙希の姿はなく、奏雅は渦巻く世界に一人ポツンと残された。

煌びやかな部屋の中、ザイレイの剣が乾いた音を立てて空を切る。騎士団の二人は、自分の身に起きた事を把握できずに呆然としていた。二人は先程まで、確かにここではない場所にいたのだから。

「隊長、これは一体……？」

リユーセクタルが辺りをキョロキョロと見回し、尋ねた。

「良くわからないが、多分追い出されたんだろう……あの女に。言っておくが、白昼夢などではないぞ」

ザイレイは残念そうにため息を交え、その質問に答えた。

二人がしばらく黙ったまましていると、突如室内に光が発生し、奏雅が現れた。それを見るなり、ザイレイは口を開く。

「おい、あの女はどうした？」

微かに期待しているも、答えはわかっているという様な口調だ。

「アイツは俺達の世界に帰ったよ。さて、さっきの続き、やろうか」
奏雅は右手で剣を構え、左手で手鏡を握る。

「……誘っておいて失礼だとは思うが、お前では役不足だよ」

ザイレイは奏雅に背を向け、退室しようとしている。

「俺はまだ、スキルを使ってない。干涉者の自由スキルを！」

手と脚に最大限の力を込め、退室を妨げるべく斬りかかる。その間、手鏡を握り、スキルを発動しようとした。

「そうだとしても……だ」

オレンジの髪が宙を舞った。髪の間からは鋭い眼光が矢の様に放たれている。

ザイレイは振り向くと同時に手鏡を蹴り飛ばし、向かってきた者の喉に切っ先を突き付ける。手鏡を手放し、能力を使えなくなった奏雅は、負けを認めざるを得なかった。

「この差は、そう簡単には埋まらない」

静かに、しかしハッキリと言い残し、ザイレイはその場を後にした。
部屋には安堵のため息を吐くりューセクトルと、力無く座り込む奏雅が残る。

「えっと、結城さん……でしたっけ？ 隊長が大変失礼しました。」

あの人、食事より戦いが好きな戦闘狂なんですよ」

沈黙が続く中、耐えられなくなったりューセクトルが話を切り出す。

「それで、この後どうしますか？ 迷惑かけたお詫びに、この部屋を貸しても構いませんか？……多分。それとも、帰りますか？」

奏雅は少しの間、考え込んでいた。カッコ悪いまま帰りたくないという気持ちと、今の実力ではザイレイに遠く及ばないという事実が、頭の中でグルグル回っている。

「なあ、あんた。俺がアイツに勝つには、どうしたらいいと思う？」

予想外の返答にリューセクトルは少し困惑したが、すぐに答えを導き出した。

「結城さんは、身体能力は極めて高いのですが、隊長も言っていた通り、技術がそれに追いついていないんです。ですから、まずは基

本を身につければ良いと思いますよ。そこから経験を積んでいけば、いつか勝てるかと。何れにせよ、すぐには勝てないでしょう」

再び二人の間に沈黙が流れる。やることのないリユーセクトルは、乱れたカーペットを直し、部屋の掃除を始めた。

掃除は上から下に、奥から手前に、棚やフローリング部分は木目に沿って、テキパキと慣れた手つきで行われている。その姿は騎士と言うよりも、手慣れた主夫の样だった。

彼が掃除を終え、洗濯物を出して戻ってきた頃、ようやく奏雅が答えを出した。

「この部屋、しばらく貸してくれ。それで、明日からこの騎士団の訓練に参加する」

リユーセクトルがポカンと口を開けている中、奏雅は明日は早く起きるからと、さっさとベッドに潜り込んだ。

「部屋を貸すのは良いと言ったけど、訓練の参加については知りませんよ」

起きているのかどうかわからない奏雅に小声で話しかける。返事が返ってこないのです、どうやら寝てしまっているようだ。

「はあ……。隊長と結城さん。変な人が二人なんて、面倒見きれないよ……」

リユーセクトルは独り言を漏らし、部屋の明かりを消して退室した。

第七話 騎士団と仲間（後編）

一人の少年がランプを手に、慣れた足取りで暗い廊下を歩いている。彼は通り過ぎた扉の数を数え、十三個目で足を止めてその扉に近づく。二、三度ノックするも、中から返事は無い。

「奏雅さん、入りますね」

中性的な顔立ちの少年……リユーセクトルは一言断りを入れ、部屋の中に足を踏み入れた。

彼は巨大なベッドに歩み寄り、そこで眠っている人形のように綺麗な顔立ちの男を揺すった。

「起きてください。朝の訓練が始まりますよ。……まったく、ちゃんと起きたのは初日だけじゃないですか……」

少しばかり不機嫌になりながらも、彼は手を止めずに奏雅を揺すり続ける。

しばらくすると、その長く綺麗なまつ毛の間から漸く栗色の瞳が見られた。

「よう、悪いな。えっと……」

奏雅は眠そうに目を擦りながら体を起こす。

「リユーセクトル、ブリミナルです。いい加減に覚えてください」ため息交じりに言うリユーセクトルに、奏雅は「長い」と短く言い放つ。その時、奏雅は何かを思いついたように、少しの間思案顔をしていた。

（そういえば、言葉が通じるってことは……）

彼は上着のポケットからメモ帳を取り出して一枚破り取る。そしてそれとペンをリユーセクトルに渡した。

「名前、書いてみてくれ」

彼はそれを受け取ると、サラサラと名前を書き、奏雅に返した。そこには綺麗に書かれたアルファベットが並んでいた。

奏雅は予想が当たったというようにしたり顔をした後、剣を取り

出し、紙を宙に投げて二回鋭く剣を振った。紙は大・中・小の三つに斬られ、真ん中の紙が彼に拾われた。その紙には「ECT」の文字がある。

「よし。それじゃ、エクトだ。たった今から俺はお前をそう呼ぶ。ニックネームというやつだ、うん」

奏雅は満足そうに頷くと、訓練の準備を始めた。

彼が騎士団の訓練を受け始めてから、今日で一週間になる。その間にわかったことは、エクトやザイレイの所属するフルーエル騎士団が、この世界では最強の団体であること。それと、強いのはザイレイや総隊長を含めた五人の隊長だけであり、その他の隊長やエクト達一般兵は、奏雅よりも遥かに弱いということだった。

「なかなかの傍若無人ぶりですね、奏雅さん。まあ、そろそろ慣れましたけどね」

エクトは自分の名前が斬られた紙の残りを複雑そうな顔で拾い上げ、ゴミ箱に捨て、遮光カーテンと窓を開けた。窓からは極僅かな夜明けの光と、冷たい風が入ってくる。

その間に奏雅は準備を済まし、欠伸をしながら目を擦っている。

「お前、便利だな」

忙しそうにベッドメイクを始めたエクトを横目に、奏雅が呟く。

「ま、一応あなたもお客様ですから、それなりに持て成さないと王とか総隊長とかに叱られるかもなんで。そんなことより、早めに朝食を済ませないと訓練の時キツイですよ？」

エクトがベッドメイクを終えるまで、奏雅は伸びをしたりと眠気覚ましに励み、その後二人で食堂へと向かった。

高くなりかけた日の下、広大な敷地に活気ある声や、金属のぶつかり合う音が無数に響いている。千人近くの騎士たちがそれぞれの訓練に励み、気合いの掛け声を発していた。

その中で、奏雅はザイレイと模擬戦をしている。

「常に背後に回ってるとか、思うんじゃないよ！」

真後ろに向けて剣を振った奏雅を、横から鋭い刃が襲う。奏雅はそれを間一髪でかわすが、続けて放たれる攻撃に対応しきれず、刃の雨を浴びることとなった。

「そこまで！」

傍から勝負を見ていた金髪の無愛想な男、総隊長グロウスレイーフレイリンが試合を止める。するとザイレイは攻撃の手を止め、眠そうに欠伸をした。

その様子を見た奏雅は、総隊長に模擬戦の続きを要請する。

「まだ俺は戦える。続きをやらせろ！」

それに対し、グロウスレイではなくザイレイが代わりに答えた。

「おいおい、これは決闘じゃないんだ。それに普通の人間なら死んでいるし、お前でもあのまま攻撃を浴び続けたらタダでは済まない。勝負ありで終わりだよ。まあ、なかなかの攻撃もあったし、お前は確実に成長してるよ。まだまだだけだな」

それだけ言うと、ザイレイは首をコキコキ鳴らしながら次の相手のところへ歩いて行った。

奏雅は地面に膝をつき、唇を噛んでうなだれている。

「結城奏雅、そう気を落とすな。お前の成長には我々も驚いている。ザイレイもあんな態度だが、内心まともに戦える相手が増えて喜んでいる」

グロウスレイがそう言った瞬間、遠くの方で金属がぶつかる音がした。ザイレイが対戦相手の剣を弾き飛ばした音だった。

「相手にならないぜ。ほら、あっち行って素振り二千本！……ったく、つまんねえ」

頭をポリポリ掻きながら、ザイレイは次の相手を探し出した。

その時、訓練場に大きな音が響き渡る。それは非常時に鳴らされる巨大な鐘の音だった。

ほどなくして、慌てた騎士が息を切らしながらグロウスレイに向

かって駆けて来た。

「総隊長！ 城の西側、三キロメートルあたりにメストルが出現しました！」

その報告に、聞いていた周りの騎士たちが凍りつく。その中でザイレイだけが目を輝かせていた。

「俺の出番だな！ さて、今回はどれだけ楽しませてくれるのかな？」

炎鬼を腕に纏い、準備運動を始めるザイレイ。

その姿を横目に、奏雅は近くにやってきたエクトに小声で尋ねる。

「おい、エクト。メストルって何だ？」

するとエクトは、緊張したような様子で答えた。

「どこから来るのかわかりませんが、たまに現れる怪物の事ですよ。空を割って出現する気持ち悪い生き物です」

それを聞き、奏雅は詩亜が戦ったバケモノの姿を思い浮かべた。恐らくは、それと同一のものだろう。

グロウスレイは声を大にし、全員に聞こえるように指示を出した。

「第一部隊、第二部隊は討伐に向かえ！ 第三部隊は付近の民の保護。その他は城の警備だ！」

その指示を遮り、報告に来た騎士が大声を上げる。

「ダメです、総隊長！ メストルは一体ではないんです。およそ二十体ほどの群れを作っています！」

その言葉で辺りが騒然となった。グロウスレイはそこで考えを巡らし、新たに指示を出す。

「各部隊の隊長、及び小隊長はただちに出陣せよ！ その他一般兵は民の保護と城の警備だ！」

騎士たちはその指示に従い、迅速に行動を始めた。奏雅は総隊長の下に向かい、話しかける。

「俺も行く。多分役には立てると思うからな」

「よろしく頼む。だがお前は客人だ。無理はするなよ」

グロウスレイはフツと笑い、奏雅に答えると、槍を手に馬に跨って

駆けて行く。

奏雅は第一部隊小隊長であるエクトと、その後を追うのであった。

奏雅達がメストルの群れにたどり着くと、既にフルーエル騎士団の隊長達が戦いを始めていた。状況は圧倒的に不利であり、十五人ほどが死んではいないものの、倒れ、戦えない状態になっている。

バケモノは、奏雅が遭遇したものと形こそ異なるが、幾つかの赤い眼、黒く濡れた、巨大で異形の獣という点で同種であることが想像できた。その中の数体は、黒々とした翼を持っており、空を飛んでいる。

総隊長とザイレイを軸にした騎士団も、飛行するバケモノには為す術もなく、一人、また一人と倒れていくのみだった。

「総隊長、ただいま到着しました。我々に指示をお願いします」
エクトは、攻防の末、一度間合いを取ったグロウスレイに駆け寄り、指示を仰いだ。

「我々には対空手段がない。とりあえずは上からの攻撃に気を付け、地上の敵を殲滅する。リユーセクトルは上からの攻撃に対する守備系のサポート。結城奏雅は地上の敵に対する攻撃系のサポートだ」
グロウスレイは敵陣から目を離さずにそれを伝え、再びメストルの群れに斬り込んで行った。エクトもそれに続き、戦場へと走り出す。

奏雅は手鏡を取り出し、鏡面に触れた。彼の鼓動は微かに高鳴り、表情には自然と笑みが浮かんでくる。

「自由スキル発動！ 変身！」

その時、淡い光が奏雅の体を包み込んだ。

第八話 仲間と乱戦

光が奏雅を覆い、それは徐々に消えていく。黒い艶やかな髪が踊り、胸から先程までとは違った服が少しずつ姿を見せる。

その光景を見て、スキルというものを知らないほとんどの隊長達が驚いていたが、最も驚いたのはスキルを発動した本人だった。

干渉能力を手にしてこの世界に来る前に、彼は一度スキルを試していたのである。寝間着姿が、いつもの仕事着の様な煌びやかな姿になり、自身の期待した姿とは異なっていたために少しガツカリしていた。

だが、今奏雅を包む服は化粧たっぷりな金持ちのオバサンが好むような、セクシーな姿ではない。

肩には真紅の大きな肩当て、少しキツチリ目の白い上着に、動きやすそうなズボン。それに風で揺れるマントと、物語に出てくる西洋風の騎士の姿だった。そして、変化は服装だけではない。

「奏雅さん、剣が……！」

エクトの声と同時に、剣を包んでいた最後の光が消えた。

そして現れたのは、切っ先が強く煌めくレイピアの形だった。

以前試した時にわかったのは、どうやら干渉能力によって強化された身体能力をさらに引き上げるものだという事だった。

「姿が前と違うが、まあいいか。騎士団の皆、加勢する！」

奏雅は迫る巨大な手足による攻撃をヒラリヒラリとかわし、敵の群れに突っ込むと、前よりもはるかに軽くなった体で戦場を舞った。

「ウォー！ 炎鬼爆碎！」

ザイレイは地上の敵を斬りつけながら、それを援護しに来た空の敵に向けて火炎を放った。炎鬼の炎が届くのは十メートルほどで、対

空ではカウンターとしてしか使えない。

その炎は、空から迫るメストルに一撃を加えたものの、空へと押し返すくらいの力しかなかった。

「チッ！ 当たっても全然効いてないな！」

ザイレイが広範囲に渡り跳び回り戦闘を展開していると、彼の目にグロウスレイの姿が映った。

騎士団の総隊長は、今まさに、地上のメストル一体にとどめの一撃を放とうとしたところで、空からの攻撃でそれを妨害されていたところだった。

その攻撃は、グロウスレイの利き腕に大きな傷を残した。

「グロウスレイ、やっぱり空からの攻撃は厳しいか？」

厳しい戦況の中でも余裕と楽しみを含んだ笑みを絶やさずに、ザイレイは訊いた。

「うむ。本能动いているからこそ、余計な深追いはしてこない。見たところ地上のヤツらは大した強さではないが、空からの援護があればそれらを倒すことも難しい。このままでは確実に負けるだろう」

彼等の近くでは、真上に向けて弓で矢を放っている者もいるが、傷を負わすことすらできていない。

また遠くでは、強烈な空からの一撃に耐えきれず、地に伏す騎士の姿もある。

「そうだな……。しょうがない、先に上のを潰してやるよ。行くぞ、紫炎獅子！」

赤い炎の鬼が、例によって紫色の炎の獅子となる。

ザイレイは一体のメストルに向かって走り、跳躍した。

精霊の口から巨大な紫の炎が、宙に跳んだザイレイの下方のメストルに打ち出される。紫炎獅子がその炎を吐きだした勢いを利用し、ザイレイは高く跳び上がると、精霊のついた左手を高く掲げた。

メストル達は自身へ降りかかる危機を本能で察知し、危険因子を一斉に排除しに掛かる。

「遅いつてんだよ！ 全部まとめてブツ壊れろオーー！」

ザイレイの叫びに呼応し、その左手の精霊が妖しく光る。紫から赤へ、赤から紫へ。高速で点滅しながら発光を強めていく。

「紫炎爆砕ッ！」

ザイレイを中心に、紫の炎が巨大な爆発を見せる。その光景は、まるで機械が自爆するかのようなであった。

紫色の、高温高圧の炎が、ザイレイの周囲のメストル達を巻き込んで荒々しく燃え盛る。激しい炎に身を焼かれたメストル達は奇怪な悲鳴を発する。

「ザイレイ！？」

遠くで戦闘していた奏雅が、巨大な爆発音に反応し、顔を上げる。すると、空を飛んでいたメストル達が撃ち落とされた鳥のように地に落下していく中、それらに混じって同様に落下するザイレイの姿があった。

奏雅は飛躍的に強化された身体能力で近くの敵を薙ぎ払い、駆けながら跳躍してザイレイを受け止めた。

「ザイレイ、何やってんだ！ まだ敵は半分近くも残ってるってのに……」

メストル同様、その体は猛る炎に焼かれて傷つき、もはや戦闘どころか動くことすら困難な様であった。自身のコントロールにより死は免れたものの、高威力の爆発の中心部に居た彼には、相当な力が加えられたのだろう。

「……俺としては、まだまだ戦いを楽しみたかったけどな……。俺も騎士の、それも隊長だ。自分の欲求を満たすより、戦に勝つことが最優先なんだよ……！」

空を飛ぶバケモノによって影ばかりだった地上には、今は日の光が遮られることなく降り注いでいる。

ザイレイの左手の精霊は弱り切った様子で、鬼の形でも獅子の形でもなく、ぼやけた光の球になっており、日の光によってさらに薄まって見えた。

「ザイレイ、無事か？」

グロウスレイが駆け寄り、声を掛ける。その口調は冷静そのもので、乱れた様子は一切ない。

「……当たり前だ……！ 自分の攻撃で死んでたまるかよ……！でもまあ、これで勝てるだろ？ さっさと潰してこい！」

グロウスレイはコクリと頷き、再び戦いへとその身を投じた。一方奏雅はその場に残り、ザイレイの傷の手当てをしようとした。

「オイ、何してる、結城奏雅」

ザイレイは半目で睨むように奏雅に訊く。

「何って……応急処置だろ。このまま放っておく訳にもいかないだろ」

（しかし冷たいな……。仲間が体張って突破口を作ったって言うのに、その代償で負傷したコイツに見向きもしない……。）

周りでは騎士達が何事もなかったかのように、メストルを打ち倒さんと奮闘している。その中にはエクトの姿もあった。

「退けっ、奏雅！」

ザイレイは突然大声を上げ、痛みで動かない体を強引に使い、奏雅を蹴り飛ばした。

その刹那、今まで奏雅の立っていた地に、巨大な獣の爪が深々と突き刺さった。その爪の主を、ザイレイは再び重い体に鞭打ち、攻撃する。偶然にも急所に剣が刺さり、そのメストルは悲鳴を上げて倒れた。

大きく鋭いメストルの一撃は、干渉能力がある奏雅にとっても致命傷になり得るほどの威力がある。それゆえザイレイは奏雅を避けさせたのだ。

「敵を倒すことだけに集中しろ！ 俺達は俺達で自衛する……」
その声を最後に、ザイレイは呼吸を荒げ、グツタリと地に伏した。
無理して動いたために、体への負担がさらに増したのだろう。

奏雅は一瞬駆け寄ろうか迷ったが、剣を握り直してメストル達の元へ向かった。

「貫けエッ！」

今まさに、エクトに向かって爪を打ち込もうとしていたメストルに、風と共に突撃する銀のレイピア。

疾風のごときその突きは、強い抵抗を受けながらも、対象の皮膚を、そして肉を貫いていく。飛び散った体液が掛かる前に、奏雅は体外へと飛び出て離れた場所に着地していた。

「奏雅さん、ありがとうございます！ やりましたね」

エクトは敵を仕留めた奏雅に近寄り、賞賛する。それに対し奏雅は、手をプラプラと振りながらぼやいている。

「くそっ！ 自分の動きが早過ぎて、手に力を入れるタイミングがわからない……！」

何度か手を握っては開いた後、エクトに問いかける。

「戦況はどんな感じだ？」

問われたエクトは、辺りをキョロキョロ見回してから返答する。

「メストルは残り四体……あ、総隊長が今、一体倒しました。我々フルーエル騎士団で戦闘可能なのは、僕と総隊長、その他……えっ！？ ……一人、です……」

実力はともかく、状況把握は戦場慣れしているエクトの方が、奏雅よりも遥かに早い。

「なに！？」

先程までは十人近く戦っていた騎士たちが、今や三人しか立っていないことに、二人は驚きを隠せないでいる。

「おかしいです。確かにメストル達は強いですけど、我々騎士団も、簡単にやられたりはしないはずですよ。今は空からの邪魔も入りませんし、敵の数は多いですが、今回のヤツらは今までに比べてそう強いとも思えませんから……。奏雅さん、気をつけてください」

遠くではグロウスレイと一人の騎士が共に戦っている。その騎士は恐らく、総隊長やザイレイに次ぐ力を持つ者だろう。グロウスレイの動きに合わせて戦闘できている。

「マズイ！ ヤツら囲まれたぞ！ エクト、助けに……！」

奏雅とエクトが走り出した瞬間だった。バケモノに囲まれた二人の足元が盛り上がり、勢いよく宙へと放り出される。

続いてその地面が発光し、そこから巨大な赤い光の球が彼等に向けて発射された。

「総隊長オーー！」

エクトの叫びも虚しく、彼等は光に飲み込まれ、さらに遠くへ吹き飛ばされていった。

「まさか……地中から!?」

メストルの移動音で気付かなかったが、微かに地面が揺れている。ソレは、恐ろしくスムーズに地中を泳いでいるのだ。

「チッ……! 先にアイツらを片付けるぞ! 地中のヤツはそれからだ!」

奏雅はマントを翻し、エクトに指示を出してから地上のメストル三体に向かって走り出した。

一步一步を強く蹴りだし、風よりも速く接近する。

速さのせいであろうか。奏雅は体に当たる風が、妙に涼しく感じた。加えて、辺りが暗くなる。

そして、それらとは全く別に感じる寒気……。本能が警告していた。

「奏雅さん! 上!」

エクトの声よりも早く、奏雅は空を見上げていた。

「嘘だろ……!?!」

そこには、二体の、さきほどのメストル達とは比べ物にならない大きさのメストルがいた。

ソレらは黒々とした体から血のように赤い眼を四つずつ光らせて、奏雅たちをあざ笑うかのように咆哮するのだった。

第九話 乱戦と援軍

空を駆ける二体のメストル。粘液で濡れた漆黒の体と、四つの赤い瞳、鋭い爪や牙は、今までのものと似通っている。だが、今回のソレらは体の大きさが倍近くあり、漆黒の大きな翼と硬そうな鱗を持っている。その見た目は龍のようであった。発せられる威圧感から、今までのメストルとは格が違うということが一目瞭然である。加えて、こちらの戦力は自分の力を使いこなせない奏雅と、実力的に戦力として期待できそうもないエクトの二人。

状況は絶望的である。

「奏雅さん、どうしますか？」

エクトは歯をガチガチ鳴らしながら、奏雅に尋ねる。その震えは恐怖からではなく、緊張からくるものだろう。肩にも力が入っている。「どうするって……とりあえず、空と地中からの攻撃に特に気を付け、負傷した騎士たちを避難させつつヤツらの行動パターンを……うおッ！」

作戦の説明中、彼等の足元が急に盛り上がり、二人はやむを得ず回避行動を取った。二人の立っていた場所は、まるで火山のように爆発する。

「エクト、後ろッ！」

奏雅が体勢を立て直し周りを見ると、二人は地上の三体のメストルに囲まれていた。その一体が腕を振り上げ、エクトに向かって振り下ろす。

奏雅は援護しようと囲まれた中心に移動する。エクトは攻撃を避けようと、同じく中心に……。

「しまった！」

二人が中心に立ったその時だった。

例によって地面が大きく膨れ上がり、爆発する。

「うわあああ！」

エクトは自身の槍で防ごうとしたが、形の無いエネルギーの塊の前では意味もなく、空高く吹き飛ばされていくだけだった。

一方奏雅も、干渉能力のおかげで衝撃は少し緩和されたが、元々がほぼ全身に加えられる攻撃なのだ。そして、この時ばかりはその干渉能力が裏目に出た。

圧力を分散させる能力の影響で奏雅は全身が麻痺し、さらには吹き飛ばされないという状況になっていた。

（マズイ。このままじゃ袋叩きだ！）

三方向から地上の突撃に加え、空から放たれる火炎球。

奏雅は向上した身体能力で隙を縫うように回避するが、追撃、また追撃と、しつこい猛攻を受け、体勢を崩してしまう。

よろけ、地に手を着いた時、真上から再び火炎球が撃たれた。

「ぐあああ！」

一発、二発、三発……。躊躇われることなく、火球が雨のように降り注ぐ。悲鳴は火球の着地音に掻き消され、痺れる体では避けることが出来ない。前後左右、奏雅の目に映るのは、赤く燃え盛る炎だけだ。

（そういえば、山賊達にもこんな風にやられてたっけな……。あの時とは敵の強さも全然違う。でも……。俺の力だって、あの時とは違うんだ！）

奏雅は唇を強く噛み、目を鋭く光らせる。手に、足に力を込めて、強く地面を一蹴りする。

進めども進めども炎。一瞬の出来事のはずが、やけに長く感じられる。

やがて、右側にユラリと巨大な影が見えてきた。奏雅は進路を変え、その影に向かって突撃する。

「喰らえェ！」

奏雅は敵の直前で高く跳び上がり、赤い眼の一つにレイピアを刺す。そしてその剣を足場とバネに、さらに跳躍する。

「まず一体！ そして、もう一体！」

空を飛ぶメストルよりも高く上がった奏雅は、両手を組んで敵の後頭部にそれを打ち込んだ。

本来人の力では太刀打ちできないメストルだが、干渉能力と自由スキルの併用で高まった奏雅の一撃は、ソレらに通じるものだった。だが、決して素手で倒せるという訳ではない。

攻撃を受け、危険な敵だと判断したメストルは、重力によって落下する奏雅に火炎球の追撃を仕掛ける。

（これ以上アレを喰らったら、さすがにヤバイぞ……！）

奏雅は落下と同時に、メストルに刺さっている剣に手を伸ばす。しかし、対象の周囲には地上に二体のメストル、地中にも巨大な蠢く影が見える。

（届け、届けエッ！）

大きく開いた手を、力の限り柄に近づける。焦りか、すぐ後ろに迫って来ている火球の熱のためか、奏雅の額から汗が流れる。

ガシッと剣の柄を掴み、奏雅はそれを火球に突き刺した。

すると切っ先からサッカーボール大の何かが飛び出し、炎を巻き込んで上空の敵に直進する。

（風の……弾丸？ 必殺技か！？）

奏雅は驚きと歓喜の表情で、空へ駆けあがる球体を目で追った。炎を纏った風の弾丸は、大きく口を開けたメストルの、まさにその口内にねじ込まれた。強烈な衝撃を、声の発生源から体内に受けたメストルは、悲鳴を上げることすら許されずに、ただ無力にその身を刻まれて地に墜ちていく。

「ハアアアア！」

奏雅の着地と同時に、いつの間にか近くに来ていた傷だらけのグロウスレイが敵の攻撃も顧みずに特攻し、胸の深手の傷を代償に敵の頭を切り裂き、地上の一体を葬った。

倒すべき敵はあと三体。地中、地上、空中に一体ずつである。

宙に放り出された満身創痍の総隊長を受け止め、地面にそっと降ろした奏雅は再び剣を構え、先ずは地上の敵と対峙する。

「すまないな、結城奏雅。お前にばかり戦わせてしまつて……。再び動けるようになった者から、我々は命を賭けて援護する」

傷つきながらも途切れることなく言葉を紡いだグロウスレイは、言い終えるとゆっくりその身を横にした。するとその時、何かに気づき、大声で警告した。

「離れろッ！」

その声が奏雅に聞こえた瞬間、地面が光り、足元が火山のように爆裂する。それは奏雅と、近くのグロウスレイをも巻き込んだ。

遠くで鈍い音を立てて墜落するグロウスレイと、耐え難い衝撃を受けた奏雅は二人とも気を失い、その場に壊れた人形のように横たわるのだった。

短時間で傷が治る訳ではない。ただ、休息を取ることと筋肉や精神を落ち着かせることで、無理をしながらでも戦えるようにする。倒れた騎士たちは、仲間が傷つく光景を眼前にじっと耐え、自身の復活を待っていた。

しかし、たまたま近くに居合わせ共に待機していたエクトとザイレイは、奏雅とグロウスレイの倒れる様を目撃し、鉛の様な体に鞭打ち弾けるように立ち上がった。

地に伏す彼等に向かい、地上の敵が牙をむき出し、爪を光らせて迫る。

「させるかッ！」

二人は気を失った仲間を助けるべく、メストルに向かって疾走する。近づくに従って、敵の姿がよく見えてくる。牙の生えた二つの口が歪んでおり、赤い眼が妖しく光る。それはまるで見下したような、あるいはあざ笑うかのような卑しい笑みのようだった。

気付くとエクトとザイレイは全身を強打し、真上へと飛ばされていた。

その攻撃はザイレイを狙ったのであろう。爆心地近くに居た彼はグロテスクな音と共に大地と衝突し、血を流して横たわった。

直撃を免れたエクトも吹き飛ばされ、立ち上がる気力や体力を奪われてしまった。

（もうダメだ……）

歯をギリギリと鳴らすエクトの耳に入る、バケモノ達の勝ち誇ったような咆哮。彼の目には悔しさからか痛みからか、うっすらと涙が浮かんでいる。

他の騎士たちも拳を握りしめ、恨みのこもった視線を敵に向けているが、戦えそうな者は誰もいない。

（新手……！？　こんな時に！？）

ビキビキと空間が割れ、そこから姿を現す何か。エクトは完全に絶望し、情けない瞳でそれを見る。しかし意外にも、そこからは人の声が聞こえてきた。

「あゝ、悲惨な状況ですねえ。不幸中の幸い、死者は今のところゼロのようですけど」

「沙希さん、もっと緊張感を持ってください。瀕死の方も何人かいらっしゃるようですから」

現れたのは白いローブを着たツインテールの小さな女の子と、エプロンを付けたポニーテールの若い女性の姿だった。

「じゃあ皆さんに被害が無いように、『W－P－3』あたりにしときますかあ？」

沙希は手鏡を手にも、少女に尋ねる。

「いえ。今回の相手はどうやら特殊なモノのようです。干渉能力は効きそうにないので、『F－P－4』にしましょうか」

また疲れることを……と言いたげにため息を一つ洩らし、沙希は手鏡に指を当てた。

『F－p－4』とは『W－p－3』のように防御世界に移動させるのではなく、ボクシングのリングのように指定範囲内では戦えないようにするものである。レベルによって範囲内と外の境界の強

度に差が出る。

戦闘を行うために人工的に作られた異世界である防御世界と違い、『F—p—4』は範囲内の人や地形などに影響が出てしまうため、攻撃を制限しなければならないというのがデメリットだろう。

「じゃ、『フィールド・オブ・プロテクト レベル4』、防御領域、展開。しいちゃん、頑張れ〜」

沙希を中心に、半径一キロメートルくらいが半透明の球に包まれる。

その力の特殊な雰囲気を感じ取り、奏雅は意識を取り戻した。何が起こっているのか。彼はまだ動かない身体をそのまま、瞼を少し上げ、音を集中して聞き取ろうとしていた。

「地中の敵は少々厄介です。私がそれを引き受けますので、沙希さんはその他をお願いします」

「ええっ!? フィールドを展開しながら!?!」

異世界への移動とは異なり、防御領域を維持するには発動時程ではないにしろ、それなりの力が必要になってくる。

沙希は「人遣いが荒い」とでも言いたげな不満顔をするも、減給の後ろ盾があるためか渋々了承した。

「……詩亜。なぜここに?」

弱り切った口調で、しかしホッとしたように奏雅は少女に尋ねる。凜と立つ彼女の姿からは幼い見た目をものともしない心強さを感じられ、情けなくも安心する奏雅だった。

「詳しい話は後で。今はこの戦いを終わらせませす。沙希さん! どうやら敵の援軍が十体ほど現れそうですので、そちらの相手もお願いします。こちらを片付け次第、私も援護しますから」

「そ、そんな……! もうっ、臨時ボーナス請求しますからねっ」

詩亜は金色の輪を投げ、空中で地面と平行にそれを留める。その上に手をかざすと、エネルギーが収束し出した。

一方沙希は、詩亜の宣告通りに現れたメストル達と、先程から居た空と地上の敵と戦うべく、手鏡から武器を取りだした。その形状

はハンマーであり、黄色の柄と赤く特徴的な形のヘッド。可愛らしいその武器は柄が長く、大きめなサイズとなっており、シルエットだけ見れば戦闘用だと言えるだろう。

「……ピコピコハンマー？」

エクトは目を点にして、エプロン姿で大きな玩具をもった女性を見つめる。ファンシーな彼女の前には、血走った眼の怪物たちが牙をむき出しにし、今まさに襲いかかろうとしていた。

「逃げてください！ そんな武器では勝ち目が……！」

エクトは途中で言葉を切った。思い出される、騎士団最高クラスの実力者であるザイレイを、全く寄せ付けなかった彼女の力。

「大丈夫ですよ。確かにこれは相当な異常事態ですけど、私達には日常茶飯事ですからあ」

ブン、とハンマーを一振り。すると離れた場所にいるメストルの頭にヒヨコの幻影が現れると同時に、衝撃を受けたかのようにそれは倒れた。

「サクッと片付けて、イチゴクレープでも食べに行きましょう。ね？　しいちゃん。あ、もちろん店長の奢りで」

「こんな時だけ店長扱いですか？　まあ別にいいですけど」

傷つき倒れた屈強な男達の傍で、異形のバケモノと対峙しながらも余裕たっぷりで呑気な会話をする二人の女の子。

「……自分が情けなさすぎる……」

その奇妙な光景を目にし、エクトは小さく呟いた。

第十話 援軍と黒い影（前書き）

正義の味方、満を持しての登場！ さあ戦いの結末は如何に……？

……と、ちょっと煽ってみました。

では御覧下さい。どうぞっ。

第十話 援軍と黒い影

金色の輪に、どこからか次々と注がれるエネルギー。光として目視できるそれは徐々に大きさを増していた。そしてある程度肥大化したところで、詩亜は翳していた手を輪から離れた。光の巨大化はその時を境に停止した。

詩亜は顎に手を当てながら、じっと戦場を見つめている。

「詩亜、それでどうやって地中の敵に攻撃するんだ？」

ようやく意識がはっきりしてきた奏雅は、詩亜の武器を見つめて尋ねる。それに対し詩亜は、片目を茶目っぽく瞑り答える。

「それは見てのお楽しみですっ。……ん、そろそろですか」

詩亜は金の輪をフリスビーの要領で構える。その視線の先には巨大なピコピコハンマーを手にした沙希と、それを囲むように群がるメストル達。増援した敵は先程までのものより大きく、凶暴だ。結果、先の生き残りである一体が子供のように見える。

「わわっ！　なんか凄い群がって来てますよう。こっち来ないでください」

騒ぎ立てる沙希。突然その足元が発光した。

「沙希さん、飛翔！」

言うと同時に、詩亜は輪を沙希の居る場所に向かって投げる。

「は、はい」

間の抜けた返事をし、沙希は地を蹴って空に浮かび、そこから急速で離れる。

何度も見た爆発が起こる中、今までと異なるのは宙に停滞する金色の輪。

上空から沙希の声が聞こえる。

「煌めいて、ときめいて、貫いて♪ 放て必殺のしいちゃん☆すぺしゃる。レンディア・フルハーート！」

「勝手に変な前口上と名前を付けないでください。……撃ちます！」

いつか奏雅が見た、青白い巨大閃光が地に向かって撃ち出される。それは湧きあがる爆発をいとも簡単に押し返し、地中で弾けた。

悲鳴か、地震か。けたたましい音が鳴り、次第に地面が鎮静化していく。詩亜はようやく立ち上がった奏雅の方を見て笑いかける。

「どんな敵も、攻撃の瞬間はどんな形であれ、私達と繋がっているんですよ……普通は……」

最後の言葉はとても小さく、奏雅はよく聞き取れなかった。

「さて、それじゃあ私は沙希さんを手伝ってきますね」

笑顔を絶やさずに詩亜が告げる。しかしその顔には汗が浮かび、青白くなっており、よく見ると足元には血が流れ出ていた。

「詩亜、どうした？」

「あはは。大丈夫ですよ。ここに来る前、ちょっと手酷くやられちゃいまして、撤退してきたんです。そんなことより、早く沙希さんの援護に行かないと……」

奏雅は驚きの表情を露にする。最強とも思えるような力を持つ彼女に深手の傷を負わせる敵が存在するとは思わなかったためだ。

しかしすぐに我に返り、彼女を引きとめる。そんなケガをしている少女を戦いには送れない。

「待てよ。沙希ならアレくらい切り抜けられるんだろ？ なにもケガした詩亜が行かなくても……」

彼の言葉を遮るように、詩亜はフルフルと首を振る。

「確かに沙希さんは強いです。でも、ダメなんです。だって……」
チラツと沙希の方を見る詩亜。奏雅も釣られてそっちを見る。

「だってあの人、基本的に体力ありませんから……」

二人の視線の先には地面に座り込んでいる沙希がいた。

「さらに言うと、やる気も根気ありませんから」

遠くでは沙希がなにやら文句を言っている。

「もう、重労働ですよ。なんなんですか、この数はあ。虫みたいにワラワラ集まってえ」

未だに保つ詩亜の笑顔も徐々に弱々しいものになりつつある。

「だから私が、助けないと……」

歩こうと踏み出した足がよろけ、倒れる詩亜。奏雅は咄嗟にそれを受け止める。彼女の呼吸は腕の中で段々と荒くなる。体はグッタリとし、ローブからは血が滲んできた。

よほどの激戦だったのだろう。それに加えてここに駆けつけるという無茶な行動。疲れや傷が、見て取れるだけでも、少女どころか人間の限界を軽く超えている。

「しいちゃん!？」

遠くで座り込みながら応戦する沙希が倒れる詩亜を見て、声を掛ける。今にも目を瞑りそうな詩亜はそれに答えるだけの声も出せずにいる。

「そうだ、早くしいちゃんの手当てをしないと……」

慌てたような声で漏らす沙希。その言葉の途中、彼女の気が緩んだと思ったのか残った十二体のメストルが一斉に襲い掛かる。上から一体、三百六十度周りに十一体。

「そこで転がっている人、槍を借ります!」

「えっ? あ、はい。どうぞ」

いつもの間延びした声はなりを潜め、凜とした声で言う沙希に、エクトは槍を差し出した。

沙希はそれを受け取ると宙に放り投げ、その柄頭をピコピコハンマーで強く打った。

「喰らえ究極最大一撃必殺! ヴォーテックス・スピアー!」
勢いよく発射された槍は、まるで意思を与えられたかのように次々と敵を追尾しながら貫いていく。

周りを囲んでいた敵を円を描く様に一掃した後、空から襲いかかってくる最後の一体に突き刺さった。

「プレス・エンド!」

沙希は指をパチッと鳴らした。その音と同時に槍が炎を伴わない大爆発を起こし、メストルと槍が跡形もなく消滅した。

「ぼ、僕の槍が……!」

口をあんどりと開け、空を見上げるエクト。

そんな彼には目もくれず、沙希は珍しくマジメな顔で地中のメストルが死した場所へ歩いて行った。彼女は爆発後の穴に潜り、ゴソゴソと何かを探っている。

「沙希さん、どうですか？」

先程までのように強がった口調は無く、弱り切った少女のそれで沙希に声を掛けた。

「禁呪術の刻印……やはり第一級犯罪者、クロノエッジ首領、ザグイⅡラⅡドイクエのものです」

沙希は氷の刃の様な鋭い口調で報告する。ピリピリとした雰囲気がおも続いている、奏雅やエクト、その他の騎士たちも声を出せずにじっと聞き耳を立てていた。

「……そうですか。沙希さん……」

「はい」

どこかの軍隊のようなハキハキとした受け答え。次はどんな言葉が来るのだろうと、皆が見守っていた時だった。詩亜はゆっくりと口を開く。

「お疲れ様ですっ」

張りつめた空気を払拭するかの様な可愛らしい少女の笑顔で告げる。その表情もまた、彼女の無理なのだろう。しかし自然に出たものでもあり、キラキラと輝いている。

「はい。しいちゃんも早くケガを治して、一緒にイチゴクレープを食べに行きましょう。私、今回は頑張りましたので、もちろん店長の奢りですよお？」

沙希の態度もいつも通りに戻る。意識のある騎士たちは次々立ち上がり仲間の応急処置を始めた。

沙希も詩亜に駆け寄り、手当てを始める。

「もちろんです。トッピングだって付けちゃいますよ？」

「ホントですかあ？」

「それも、一週間毎日です。……だって、嬉しかったですから。沙

希さんが私のために、あんなに疲れそうな技を使ってくれて……」
顔を少し赤らめ、嬉しそうに言う詩亜。それを聞いた沙希はパーッと顔を明るくし、詩亜に抱きついた。

「可愛い過ぎですよ、しいちゃん。……ていうか、水臭いです。私達、親友じゃないですかぁ。しいちゃんのためなら、アレくらい疲れでもなんでもありませんよう」

晴れた空に、二人の少女のほほ笑ましい会話が響き渡る。周りでは傷ついた騎士達も互いを労う様に語り合っている。

こうして騎士達の死を覚悟した激戦は、少女達の援護もあり、奇跡的に一人の戦死者も出すことなく終わりを迎えたのだった。

暗雲の立ちこめる空の下、黒いローブを身に纏いフードをすっぴりと被った人物の手の上で、光っていた印が静かに消えた。伸び放題の髪が風で揺れ、歪んだ口元がチラリと覗かせる。十センチメートルほどに伸びた爪をカチカチいわせながら、誰もいない宙に向かって呟く。

「この圧倒的な力の反応……クレンシア嬢か。ヤツが来ると思ったんだがな。この結末を見やがったか、カシアンⅡメルクエイド……！」

言ってからクックと笑い出す。それから思い出したかのように懷から水晶玉を取り出した。それには、ぼんやりと眼鏡の男の顔が映っている。

「やはり居場所は掴めないか。我が邪魔をし続ける障害の分際で、随分と生意気な！」

パキンと音を立て、灰色の手の上で水晶が砕け散る。

「フン。まあいい。次に我が前に現れた時が、貴様にとって地獄の始まりとなるだろう……！」

高笑いする彼の隣、その空間が割られ、一人の若い男が姿を現

す。

「また独り言かい？ ザグイ」

嫌味そうな笑みの男が尋ねる。

「さてな。それでカミヤ、ヤツは引き込めそうか？」

ザグイは髪で隠れた顔を男に向け、静かに尋ねる。

「ああ。僕と同じく、所属はしないが協力はしてやる……だとさ」
その答えを聞き、ザグイはまたクックと笑いだした。

「これで準備は整った。あとは暫し、機が熟すのを待つのみ……」

「相変わらず気持ち悪いな、君は。さて、それじゃあ僕は適当に遊んでくるよ」

そう言いながら手鏡に触れ、干渉を始めるカミヤ。

「余計なマネはするなよ？」

冷酷な口調で言い放つザグイに、カミヤは顔だけ笑って答える。

「この僕に指図をするな、下劣なゴミクズが！」

光に包まれ、その場から消えるカミヤ。残ったザグイはおどろおどろしい声で再び呟く。

「いいだろう、その力で暴れてみせろ。……フフ、面白くなりそう
だ」

第十話 援軍と黒い影（後書き）

第十話 沙希、大活躍の巻。いかがでしたか？

最後ちよろっと伏線張っておきました。

うん、少女達の力と男達の情けなさが露になった話でしたね。

ヒーロー役を取られて奏雅君もしょんぼり。

大丈夫。男ってのは、戦いの中で成長するものさ。

これからも頑張って更新しますので、次回も読んでくださいね。
ではまた。

第十一話 黒い影と帰還

遮光カーテンにより作られた闇の部屋、コンピュータの画面からぼんやりと放たれる光が青年の顔を照らす。カタカタとキーボードを叩く音、マウスのクリック音が静かな部屋に響いている。

コンピュータが置かれた机の上には膨大な資料が散乱し、冷めたコーヒーカップがぞんざいに置かれている。

「お邪魔するよ」

部屋のドアからでもなく、窓からですらない。その男は突如青年の部屋に出現し、声をかける。青年は特に驚いた様子もなく、画面を見続けている。

男はそんな反応に慣れているように、澄まし顔で言葉を続ける。

「御堂、例の依頼、進み具合はどうだ？」

御堂と呼ばれた青年は面倒そうに資料の山から茶色の封筒を引っ張り出し、近づいてきた男に突き出した。男は早速その中身を取り出し、ペンライトで照らして内容を確認する。

「俺はお前のところと違って、これくらいの情報を集めることくらい容易なことだ。神谷財閥のお坊っちゃん。企業の格が違うんだよ」

「僕の方はセキュリティが厳しくてね、御堂家と違って。父上に内緒で使うのは容易じゃないんだよ」

互いに毒突き合い、間に険悪な空気が流れる。両者の鋭い視線がぶつかり合い、歯がギリギリと鳴っている。この雰囲気では、いつ戦いが勃発してもおかしくない。

「ゴミクズが！ 口だけは達者だな。死にたいのか？」

御堂は左手に手鏡を握りしめ、立ち上がって闘志をむき出しにする。神谷はそれを見て表情をフツと和らげ、両手を上げた。

「待ちなよ、御堂。今の僕等は、少なくとも形だけは協力関係にある。僕の負けで良いからさ、その鏡を収めてくれないか？」

見下したような態度が鼻につく。だが、確かに戦うことにメリツトは無い。御堂は荒ぶる感情を抑え、手鏡を懷に放り込んだ。

「一緒に行くかい？ カシアンの抹殺。居場所を調べたのは君だからね。手柄を譲ってもいい」

嘘に塗れた言葉が神谷の口から飛び出る。

「断る。俺はお遊びに付き合えるほど暇じゃないんだ」

御堂の答えを聞くか聞かないかのうちに、神谷は干渉を開始した。光が彼を包み、同時に声が残された。

「そうか。ではまた会おう、御堂霧也」

神谷の発した光と音が消えると、御堂の部屋は元の様子に戻った。

豪華な装飾の施された広間に、奏雅と沙希、それにザイレイとグロウスレイが集められた。赤い絨毯の続く先には、玉座に威厳のあるフルーエル王が座している。詩亜も呼ばれるはずだったが、深手を負っているため、別室で安静にしている。沙希が謁見している間の看病はエクトが行っている。

奏雅は直立し、ザイレイ達が片膝を地についている隣で、沙希は一人イスに座って足をパタパタ動かしていた。王の御前だというのに「立ったいるのが疲れる」という沙希の主張を、救われた彼等は誰一人として無視はできなかったのだ。

「まずはお礼を言おう、干渉者達。して、早速だが色々と説明をしてもらいたいのだが……」

王はチャリと沙希を見た。機嫌を窺うというのもあったのだが、国を救った者があどけない女性であることが気になっているようだ。「えっと……説明って面倒なんで、わからないところだけ質問してもらえますかあ？」

明るい口調で返された言葉に、隊長達が素早く反応して顔を歪める。「王に対してなんて態度だ」と言いたい様だ。だがイスの件と

同様、誰も指摘できない。

「ふむ。報告によると今回は前例のない異常事態だったそうだが、原因などはわからないだろうか」

王は寛大なのか、沙希の態度を特に気にする風でもなく質問を始めた。

「アイツ等って、全く異質の世界で生まれるんですけど、偶然干渉能力を持ったヤツだけがノコノコとやってくるんですよ。でも今回現れたのは全部その能力を持っていなかったんです。で、原因なんですけどお、地下に居たヤツに広範囲召喚呪術の刻印が付けられていました。あ、召喚呪術ってのは名前から察してくださいねえ」

ここで沙希は手を挙げて会話を中断した。

「すいませ〜ん。イチゴのケーキありませんかあ〜？ 食べたいんですけどお〜」

突然の要求に困惑するお付きの兵士達。それに王は「お出ししろ」と命じた。

（やりたい放題だな）

奏雅は能天気な沙希を見てため息を漏らす。

「それで、呪術というからには術者がいるのだろう？」

常に用意してあるのか、ケーキはすぐに運ばれてきた。沙希はそれを見て眼を輝かせ、嬉々として食べ始めた。

「あ、紅茶もお願いしま〜す。……あ、術者ですか？ それはクロノエツジとかいうあらゆる世界に現れる犯罪組織のドン、ザグイⅡラⅡドイクエとかいう、呪術のスキルを持つ干渉者ですよ。アイツにはホント困らされてばっかりでえ〜……」

もぐもぐとケーキを頬張りながら、「他に質問は？」といったような顔を王に向ける。

王は少し考えた後、質問を続けた。

「その者達の目的は？ それとこの国……いや、この世界が再び狙われる可能性は？」

間髪入れずに彼女は答える。

「知りませんよう、そんなの。まあ推測はできますけど、それは秘密です。で、この世界が狙われる可能性については……大丈夫じゃないですかあゝ？　もし何かあっても、今回のようにビシッと助けに来ますので、ご安心を」

運ばれてきた紅茶をすすり、幸せそうに一息つく沙希。彼女から聞き出せる情報は何かと王が考えていると、ザイレイが口を開いた。「干渉者は戦闘によって傷を負わないと聞いているが、あの詩亜という娘は深い傷を負い、ボロボロだった。それは何故だ？」

「誰も傷を負わないとは言ってますんよ？　圧力を分散するだけですもん。慣れてくると体外に衝撃がある程度逃がしたりできますけど。で、分散速度は個人の能力に応じますけど、それよりも早い攻撃や、何らかの形で分散能力を妨害されると普通に傷つきます。クレンシア……もとい、しいちゃんは凄く強いですけど、ただ単にそれを上回るのが居たってだけですよう」

沙希の話を聞きながら、奏雅はザイレイとの戦いを思い返していた。後ろから攻撃された時、背中の方が痛みが強かったことを。そしてその時から漠然とだが予想はしていた。圧力分散能力も、個人の能力次第なのではないかと。まさか体外にまで分散できるとは思わなかったが。

ザイレイは質問を続ける。

「その相手は何者だ？」

菓子や茶でリラックスしていた沙希は動きを止め、眼を細めて真剣な顔つきになる。背後からは珍しくプレッシャーすら放たれており、その場の誰もがグッと唾を飲み込んだ。

「それは内緒です。今のところ貴方達には全く関係ありませんので、黙秘します」

そう言いきる沙希の様子は、メストル達を葬った後に似ていた。彼女には何かスイッチがあるのだろうか、普段とはまるで別人のようだ。

「もう戻って良いですかあ？　しいちゃんが心配なんですけどお」

いつの間にかケーキと紅茶の食器は綺麗に空になっており、沙希の表情も明るく緩んでいた。王は聞き出せる情報は少ないと判断したのか、彼女の退室を許可した。

「それで、奏雅とやら。お主は……」

沙希から聞き出せなくても、同じ干渉者の奏雅からならば何か聞けるかもしれないと思ったのだろう。王は彼に矛先を変えた。

「残念ながら俺は新米なんだ。何もわからない」

王はまた少し考えたが、結局「もう下がっても良いぞ」と言っただけで彼の退室を促した。

「グロウスレイ、ザイレイ、今後の対応について考えるぞ」

二人の騎士を従え、王は会議室へ足を向けた。

数日すると詩亜のケガは回復していった。一時は命に危険すらあったものの、特殊な治療か不思議な能力か、今では傷痕すら残っていない。

この日は奏雅、沙希、詩亜が元の世界に帰る日だ。奏雅は試しにこの世界に来たのだったが、予定よりも長く滞在してしまった。学校の出席などを考えると、そろそろ戻った方が良いでしょう。

「では帰りましょうか、お二人とも」

荷物をまとめ、詩亜が元気よく号令をかける。お世話になった王や隊長達には先程挨拶をしてきたところだ。残念ながらエクトを発見することはできず、挨拶はできなかったのだが。

詩亜は懐から手鏡を取り出した。そして鏡面に触れようとした彼女を、奏雅が制止する。

「部屋から突然消えるんじゃないかって、一応城から出てからの方が良いんじゃないか？」

「あ、それもそうですね」

「えーっ!? 面倒ですよ」

詩亜が合意し、ブツブツ言いながらだが沙希も退室する奏雅について行った。

彼等が通るたび、騎士達は感謝の声をかけてくる。奏雅と詩亜は嬉しそうに微笑み、沙希は調子に乗って手を振っている。

三人は城門の手前で足を止めた。

「奏雅さん、良いんですか？ エクトさんに挨拶をしなくても」

仲の良かった二人が黙って別れることが気になる詩亜。それは奏雅も同じであった。

「まあ、時々顔を出すから良いさ。いつでも来れるんだし」

最後に一目、少しの間過ぎた城を眺め、詩亜が代表として手鏡を掌に乗せた。

「待ってください！」

その時、城の方から大きな声が聞こえた。バタバタと駆けてくるその声の主は、まだ初めて会ってから十日ほどだというのに、既に見慣れた金髪の少年だった。

「エクト！ お前どこ行ってたんだ？ 探しても見つからないから、諦めて帰るところだったぞ」

奏雅の問いには答えずに、肩で息をしながらエクトはまっすぐに三人を見つめる。そして勢いよく口を開いた。

「僕も……連れて行って下さい！」

予想もしていなかった主張に、啞然とする干渉者一同。

「お前、王国騎士だろ？ 許可は取ったのか？」

奏雅が問うと、エクトはグッと黙り込んだ。そして、ゆっくりと口を開く。

「いえ、両親の説得に時間が掛かって、王国の方はまだ……」

エクトの姿が見えなかったのは、このためだったのだ。しかし、親の承諾を得られたところで、騎士団の許可が無ければどうしようもない。

「問題ない。リユーセクター、行ってこい！」

突然聞こえた声。聞こえた方向を見ると、そこに居たのはザイレ

イだった。

「ザイレイ隊長！ いいんですか？」

エクトは驚き、ザイレイに詰め寄った。王に忠誠を誓った騎士のこのような行動、普通ならば許される訳が無い。エクトも勿論、そんなことはわかっていた。ゆえにエクトの心理はこのザイレイの言葉を聞き、喜び半分、疑惑半分といったところだろうか。

「おう、もちろんだ！ 第一お前、武器持っていないからな。医療品なんかを大量入荷しないといけないから、しばらく発注できないし……」

全員の視線が沙希に向けられる。彼女はすぐに顔を反らし、口笛を吹きだした。

「そんな訳で、お前は役立たずだからな。居なくても問題ない」

（相変わらず酷いな、この人）

エクトはそんなことを思う。

「ちなみに、騎士団の脱退許可は出していない」

「え？」

驚くエクトに、ザイレイは続ける。

「お前には特別任務だ。この国に脅威をもたらし、今後危険性があるかもしれないクロノエッジの調査だ。ソイツ等についていけば、何らかの情報は得られるだろ」

ザイレイは「それと」と付け加え、さらに続けた。

「武器を手に入れて、それで強くなって帰って来い。俺を倒せるくらいにな。この判断は俺の独断だし、全責任は俺が持つ。だからそれくらいの恩返しはしろよな？」

ニツと笑って言うザイレイに、エクトの眼から涙が浮かんできた。奏雅と詩亜は微笑みながら、沙希は感動のあまり号泣しながら二人のやり取りを見守っている。

「良い上司を持って幸せですね」と言う沙希に、詩亜は「私が悪い上司みたいに聞こえるんですけど」とぼやいていた。

エクトは目元を拭い元氣よく答える。

「はい、必ず！ ザイレイ隊長、ありがとうございます！」

深く下げられたエクトの頭にザイレイはポンと手を乗せる。

「ほら、もう行け。グロウスレイの堅物野郎に見つかったら面倒だ」
詩亜が手鏡を構え干渉を開始した。波紋が広がり、辺りが振動する。光が彼等を包み粒子となって消えていく。

「ザイレイ隊長！ 本当に！ ありがとうございますアーーー！」

四人の姿が消えた後、それより少し長く残るエクトの声。それをザイレイは感慨深く噛みしめていた。

「頑張れよ、リユーセクター」

ザイレイは空を見上げながら小さく呟き、城に向かって歩いて行った。

第十一話 黒い影と帰還（後書き）

この話で一段落です。次回からは新展開。
騎士団たちは今後……出てくるかなあ？
予定では少し出番がある
けど。

でもまあ、忘れてもいいッスよ。出番あってもだいぶ後なんで。
それでは次回もよろしくお願いします。

第十二話 a n e w l i f e (前書き)

お久しぶりです。

忙しかったり、パソコンが使いにくい環境だったり、保存していたUSBメモリが家出したりと、まあいろいろあって久々の更新なわけです。

この文章を読んでもくださってるということは、最新話を読もうとされているということだね、非常にありがたいです。

ネタだけはポンポン出てくる上に、この話はエンディングまで考えられているので、時間があればスムーズに更新できるんですけど…。

えー、気長にお付き合いくださいな。

あ、サブタイだけはネタ切れです。

第十二話 a n e w l i f e

光と共に四人が降り立ったのは、詩亜の鏡屋だった。窓から入り込む光が鏡面や棚、床などに反射し、キラキラと輝いている。夜だと神秘的かつ不気味に感じられたその店は、早朝だとこんなにも神聖で清らかになる。数日間離れていたただけなのに懐かしく思われる太陽の光に奏雅は自然と微笑んだ。先程まで居た世界にも似たような恒星はあったのだが、やはり慣れ親しんだ太陽とは違和感があったようだ。

奏雅がエクトをチラリと見ると、好奇心にあふれた顔でキョロキョロと色々なところに目を向けている。

「さて、私は出かけてきますので。沙希さん、後はよろしくお願いしますね」

詩亜はそう言うのと鏡面から金の輪を取り出し、干渉を始めた。その行動はあまりにも素早く、沙希を含めて誰も止められなかった。「アイツ、ケガが治ったばかりなのに大丈夫かよ。戦いに行く気満々だったみたいだが……」

「まあ色々大変なんですよう、しいちゃんは。心配ですけど、我々大人は温かい目で見守ろうじゃないですかあ」

飄々とした口調とは裏腹に、表情は心配そうなものだ。しかしそんな顔も、すぐいつも通りに戻る。

「さうて、それじゃ面倒ですけど、私は奏雅さんのせいで増えた面倒な仕事でもしますよう。極めて面倒ですけど」

沙希はエクトの襟をむんずと掴み、ズルズルと奥に引きずって行く。

「あの、僕はどうしたら……?」

「戸籍の偽造とか干渉についての説明とか色々しなきゃならないんで。今日は徹夜ですかねえ。まあ二回目なんで、手際はそこそこ良く出来ますけど、それでもやることが多くて。あ、奏雅さんは店

番よろしくおねがいしますねえ」

扉の閉まる音の後、店内は静けさに包まれた。一人残された奏雅は大きく息を吐くと、カウンターの椅子に腰掛けた。軋む音が古風な店内に響く様には趣がある。

奥の部屋から聞こえる二人が立てる物音は壁に阻まれ、どこか遠くからの音のように感じられる。

奏雅は焦点をずらして風景をぼやかし、カウンターに肘をついて考えごとに耽った。

自分の実力の無さ。服装と武器の変化。メストルとその大量発生
の原因である人物、ザグイイラストイクエ。そして、詩亜にあそこ
までの大ケガを負わせた謎の敵。その他にも考えることは山程ある。
「はい、エクトさん。考えて下さい。誕生日、出身地、偽名、それ
から……」

「えっと、誕生日は……」

二人の小さな話し声はさらに小さくなり、奏雅の視界が狭まる。

(どうせ客なんか来ないだろう……)

腕の中に顔を埋め、彼はゆっくりと眠りに落ちていった。

肩を揺する微弱な振動と女性の可愛らしい声で、奏雅は眼を覚ま
した。東に輝いていた日は既に西に傾き、店内は橙色に染まってい
る。

「ちょっと、なに寝てるんですかあ！」

ぼやけた視界が徐々に鮮明になり、頬を膨らませた沙希の顔が奏
雅の目にハッキリと映った。

「なんだ、徹夜じゃないのか？」

大きな欠伸と共に、そんな疑問が口から漏れる。先の隣に立っ
ているエクトは、呆れたような苦笑いを浮かべている。

「エクトさんは、もう訊くべきことも訊きましたし、説明すべきこ

とも説明しましたので、後は私が仕事するだけです。あ、その前に色々話し合わなくてはならないことがありますてえ……」

話し合いによって決められたのは、エクトの住居や学校についてなどだった。結果、一人で暮らしている奏雅の家で暮らすことになり、学校も行った方がいいとのこと、奏雅と同じ高校の一年生として転入することが決まった。

「しかし、騎士団で数学とかをやっていたようには見えなかったが、いきなり高校なんて、勉強は大丈夫なのか？」

しばらくの間、騎士団で生活した奏雅だが、彼等が勉学に励んでいる姿は見えていない。

「あぁ、それなら大丈夫ですよ。ちょっと裏技がありましたえ」

沙希が目配せすると、エクトは懷から鏡を取り出した。

「さっき頂きました。自由スキルは『支援』です。傷の手当てや衝撃を吸収する盾を出したりできるはずですよ」

奏雅に付いてくる以上、鏡が無ければ話にならない。そういう訳で、エクトは詩亜から手鏡を貰う約束をしていたのだ。

「手鏡が……なんだよ」

奏雅の知る限り、手鏡には勉強ができるようになるシステムなどない。もっとも、奏雅が手鏡の全てを知っている訳ではないのだが。「このエクトさんの手鏡、ほら、レリーフのところに綺麗な珠がついてますよねえ。これが裏技……です」

良く見ると、エクトの手鏡にはキラリと光る、翠色の小さな珠がはめ込まれている。

「これは世界の常識を交換するものですねえ。つまり、エクトさんが向こうの世界で十六歳レベルの常識を持っていたとしたら、こちらの世界でも十六歳レベルの常識が得られるという素晴らしい一品ですよ」

話を聞いて、奏雅は納得する。だから学校にも行くのだ。騎士団の世界に帰った時に、その知能を周りに対して劣らせないためだ。

そこで、奏雅はふと思った。異世界と常識の変換ができる道具。そんな便利なものが有るならば、自分にもくれているのではないかと。

「沙希、その珠……」

奏雅が言いかけた時、沙希はそれをすぐに遮った。

「これはこの世界専用なので、他の世界に対しては効きませんよ」

ここで奏雅は再び考える。防御世界、防御領域、受け流せる圧力。鏡から受け取れる武器に、この珠。どうも都合の良いものが有り過ぎるような気がしてならない。

その旨を沙希に伝えると、彼女は大きく機嫌を損ねた。

「都合が良いって……当り前じゃないですかぁ！　しいちゃんが、あの小さな体で寝る間も惜しんで一生懸命に作ってるんですよ！　それを何ですか、都合がよすぎるって。それでも人間ですか！」

「……すみませんでした」

烈火のごとく責め立てる沙希に、奏雅はすっかりと気圧されてしまった。その後、沙希による愚痴がしばらく続くと思われたが、仕事に取り掛かると言い、意外にもすぐに解放された。

二人が鏡屋を出てから奏雅の家に着くと、日はすっかりと沈み、辺りは闇に包まれていた。街灯や周囲の家から漏れる光が、視界を僅かに照らしている。

そんな住宅街の中、特に珍しいというものではないが、明かりの灯っていない建物が一軒。庭付きの三階建てという、少々大きめの家だ。そしてそこが、奏雅が一人で暮らしているところなのだ。

「うわ、汚いですね」

玄関をくぐり、電気をつけて開口一番、エクトはそう言った。そう言われるほど汚れてはいないのだが、エクトはどうも綺麗好きのようで、多少の散らかりも気にするようだ。

「片づけてもいいですか？」

「好きにしていざ、俺は飯でも作ってるから。お前の歓迎も兼ねて、特別に腕を振るってやるよ」

そう言って、彼らはそれぞれの作業に移った。

初めて、だが、使い慣れたという不思議な感覚で、エクトは掃除機をゴロゴロと動かしている。キッチン近くまで掃除した時に、ある疑問が浮かんだ。

「そういえば奏雅さん、料理できるんですか？」

包丁の音は、プロや主婦のようにはいかないまでも、そこそこ軽快なリズムで刻まれている。

「そりゃ一人で暮らしてるんだから、少しくらい出来て当然だろ。まあちよつと待ってろよ」

それから奏雅はフライパンや鍋を使って調理を進め、エクトがちようど掃除を終えたところに手を止めた。そうしてテーブルに並べられた料理は、どれも綺麗に彩られており、食欲をそそる見事なものだった。

「お疲れ様です。美味しそうですね」

食卓に着き、料理を眺めたエクトが感想を口にする。

「そりゃどうも。さ、食おうぜ」

そう言っていると奏雅はスプーンを手に、料理に手をつけようとした。しかし、そこでエクトからストップが掛る。

「ちよつと、『いただきます』は！？」

「お前……この世界に馴染むの速過ぎ」

エクトは食事の挨拶をし、スプーンでポトフを掬い、口に運んだ。「……これ、いつも食べてるんですか？」

眉間にしわを寄せ、不満顔で尋ねるエクト。その口は、わずかに震えていた。その様子は、今にも吐き出したいという衝動を必死に抑えているように見える。

「いや。一応、歓迎の意味を込めて普段作らない特別メニューにしてみた……んだが、不味いか？　そういえば、面倒だから味見をし

ていなかったな」

エクトに続き、奏雅もポトフを口にする。直後、その器をエクトの方に押し出した。

「……食え、お前のために作った料理だ」

「要りませんよ！　そしてこれ全部、こんな酷い味なんですか？」

ドレッシングが掛けられたサラダ、スープを指して、エクトが言う。主食であるフランスパンだけが、安心して食せるものだった。

「食ってみないことには何とも……」

そう言いつつも、奏雅はサラダを遠くに押しやり、スープを黙々と食している。エクトは恐る恐るサラダを口に運び、またしても顔を歪めていた。

「これも酷い味ですね、全体にかけられたドレッシングが。これでは残り一品も、期待はできそうに……ん！？　このスープ、すごく美味しいじゃないですか！」

エクトが最後に口にした品、それはプロ顔負けのスープだった。薄めの味付けは素材の味や風味を引き立て、出汁は味に程良い深みを与えている。

「どうしてこれだけ、こんなに美味しいんですか？」

「いつも作っているメニューだからな、豆のスープは。豆を入れるとなっては、どうしたって不味くするわけにはいかないだろう？」

エクトの問いに対する奏雅の答えは、彼には理解できないものだった。

「理由は、豆……ですか？」

「ああ、豆だ」

こうして、二人がこの家で過ごす最初の夜は更けていった。

第十二話 a n e w l i f e (後書き)

今回は平和な話でした。平和が大好きなんで楽しかったです。次回も……文字数的な関係でどこまで進むか分かりませんが、きっと平和的だと思います。

……むしろこのまま何も起こらず、起こさず、平和に楽しく過ごすというのも、ある意味では新展開で超展開かもしれないなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5248i/>

Knight of night

2010年10月8日14時34分発行